ウ〳〵と生やし、得も言はれぬ汗臭い、厭な臭氣が放出して、我と我が鼻をつく。」

モンキー「あゝヤツパリ俺の方が間違つて居たかいな。こりやモ一つ考へ直さなくちやなるまいぞ」

と君を離れて磯端に走り寄り、全身を清め、再び磯端に蹲踞して瞑想に耽つた。

涼風颯々と面を吹くさま、得も言はれぬ氣分となつて來た。向ふの島影を見れば、金砂青松繪の如く展開し、名も知れぬ羽毛の麗しき鳥、迦陵頻伽か孔雀か鶴か、確とは分らねど、長閑な聲を放ちて天國の春を歌ふものゝ如く感じられた。金銀珠玉を鏤めたる白帆をかけた神船は、或は一つ、或は三つと、時々刻々に眼下を過ぎる。されどモンキーの方には一瞥も呉れず、素知らぬ顔して進み行く船のみであつた。モンキーは益々合點行かず、心中稍不安を感じて恨めしげに、四人の船の姿を隱した方面の空を眺めて佇んで居た。」

忽ち足許の水面より綾毛の龜、忽然として泛び出で、見る間に島へ駈け上り、一生懸命に走り出した。モンキーは其龜の後に從いてスタ〳〵と走り行く。龜は益々速力を速め、遂には大木の幹に掻きつき二三間許り攀つた所で、如何した機みか、手を放し大地に顚倒した。モンキーも龜に添うて大木に駈け登つた。龜が落ちたのを見て、自分も亦手を放し、地上に顚落し、強たか頭を打ち「惟神霊幸倭奇世」と云ひつゝ、手の掌に息を吹きかけ、側所を二三回撫でまはした。痛みは頓に止まつた。龜は腹を上にし、四つの足で空を掻いて藻掻いて居る。之れを見たモンキーは、又もや地上に背を附け、手足を上げて空を掻き、龜の眞似をして居る。龜はカタリと音をさせて起き上り、又もやノタ〳〵と反對の方面に走り出した。モンキーは同じくクルリと体をかわ

し、音がせぬので、口で『カタリ』と云ひ乍ら、龜の後に引添うて、今度は四這になつて從いて行く。

龜は矢庭に湖面に向つてドブンと飛び込んだ。モンキーも亦四這のまゝ、湖水の中にドブンと飛び込んで見れば、龜は頭をあげて悠々と水面を泳いで居る。モンキーは亦龜の後に從いて首をあゞた儘に泳いで行く。手足は倦くなり、最早此上十間たりとて泳げなくなつて了つた。龜はモンキーの追ひ付き來るを待つものの如く、ボカンと浮いたまま、首を伸ばして後を振りかへつて居る。モンキーは其間に龜に追付き、甲の兩側に兩手をかけた。龜は水中深く潜り出した。死物狂ひになつて兩手を甲に掛けた儘水底に續いて行く。

フト目を開き見れば、自分の體は龜と共に、女島の磯端に上つて居た。金銀色の蜆蛎の一面に並んで居る其上を、龜は容赦なく這ひ乍ら、島山の頂きを目蒐けて進み行く。數多の蜆蛎は、今度は蛇の樣に避けず、足許をウザ〳〵させ乍ら龜の後に、一生懸命になつて追うて行く。

龜は又もや大樹の枝に登つて了つた。モンキーも亦大樹の枝へ龜の後に添うて登りついた。眼下の水面が見渡せば、霞む許りに高き島山の頂上の大木の梢から水面を見た事とて非常に恐ろしい。龜は又もや水面を目蒐けて、首をすくめ乍ら落ち込んだ。モンキーは死物狂ひになりて、水面を目蒐けて、身を躍らし、頭を下にしたまゝ、飛んで了つた。

パッと氣が付けば、モンキーは金色の龜の甲に跨がり、紺碧の湖面を、悠々として泳いで居た。龜は何時しか容積を增し船の如く大きくなり、知らぬ間に金銀珠玉を鏤め

た、目無堅間の神船になつて居る。船は纜を漕ぐ人も無きに、自然に動き出し、四人が進んだ方面を指して辷つて行く。モンキーは初めて悟つた。

モンキー「あゝ何事も一切萬事、神に任せば良いのだ。鄉に入つては鄉に從へと云ふ事がある。蛇の島へ來れば蛇と一つの心になり、蜈蚣の島へ來れば蜈蚣の心になつて、濟度をしてやらねばならぬ。蛇を呑んでも構はぬ。體を卷きつぶられても、救ひの爲には厭ふ所でない。蜈蚣が我々の肉體を苛めたがつて居るならば、何程厭らしくても、舐めさしてやるのが神の慈悲だ。神心だ。我々は理智に長けて、神の慈悲心を輕んじて居た。最早斯うなる以上は、何事も神樣のまゝに、お任せするが安全だ。……惟神靈幸倍坐世……と口任せの樣に唱へて居たが、今迄は何事も頭腦で判斷をし、青人草傚ひの行ひをやつて居たのが誤りだ。あゝ神樣有難う御座います。濟公其他の一行に、一時も早く面會の出來ます樣、御取計らひ下さいませ。モウ此上は一切萬事、賞神にお任せ致します」

と悔悟の涙を絞り、湖面に向つて合掌し天津祝詞を奏上して居る。

何處よりともなく、以前の如き美妙の音樂聞ゆ來り、麝香の如き風湖面を吹いて、其身は忽ち薄物の綾錦に包まれ、天上を行く如き爽快なる氣分に醉はされて居た。あゝ惟神靈幸倍坐世。

（大正一一、七、一〇、舊國五、三六、松村眞澄錄）

第一〇章　開悟の花（七五六）

心の色も清公が　　チャンキー、モンキー始めとし
アイル、テーナの五人連れ　　黄金花咲く海中の
龍宮島の中心地　　玉野ケ原を打ち渡り
酷暑の光受け乍ら　　涼風香る諏訪の湖
祠の前に端坐して　　天津祝詞を奏上し
浮世の衣を脱ぎ捨てつ　　生れ赤子の眞裸体
後をも先をもみず御霊　　五つの御霊諸共に
身を躍らして飛び込めば　　千尋の底より猶ほ深き
罪の凝固の清公を　　先頭に立てゝ各自は
歩むに連れて摺鉢の　　深き水底に身を沈め
一度は息も絶れたるが　　金銀珠玉を鏤めし
目無堅間の神船に　　棹さし來る神人に
救ひ上げられ常磐木の　　天を封じて立ち並ぶ
雄島の岸に救はれぬ。　　抑も此島は龍宮の
神に仕ふる百神の　　金と銀との蛇と變じ
或は螟蛉と成り變り　　澆季末法の世の中を
救ひ助けて神の代を　　建てんがために朝夕に
三寒三熱限りなき　　苦痛を嘗めて世を救ふ

潔善龍神の修業場
生れ赤子に成り變り
喉を目蒐けて這ひ込みし
玉依姫の分け御靈
龍宮島を清めんと
アイル、テーナやチャンキーを　蜈蚣の島に投げやりて
現界幽界の境なる
水晶身魂と磨き上げ
錦の船に乗せられて
雄島の岸に殘されぬ
三五教の宣傳使
心の色も清公が
黄金の蛇は何者ぞ
玉永姫の化身にて
名も清公の体を借り
苦しき修業を事依さし
罪も穢も輕衣
龍の宮居に進み行く。
一人の男モンキーは

四人の姿を見送りて
迷ふ折しも金銀の
青緑毛の大龜は
のたり〳〵と這ひ上り
茲にモンキーは後れじと
大樹の枝に駈け登り
忽ち地上に顛落し
神の御息を兩の手の
つるり〳〵と撫でつれば
緑毛の龜は足早に
善惡邪正の判斷に
浪掻き分けて浮び來る」
忽ちモンキーが足許に
山上目蒐けて這ひ出せば」
龜の後をば追ひ乍ら
龜と諸共高所より
大事の頭を打ちながら」
掌に吹きかけ疵所をば」
疵は忽ち癒ねにける
雲を霞と駈け出せば

我後れじとモンキーは　汀に進む折柄に
緑毛の龜は忽ちに　身を躍らして水中に
ザンブと許り飛び込みぬ　モンキー後より後れじと
又もや水中に飛び込めば　手足も疲れ身も弱り
息も絶えんとする處　緑毛の龜は何故か
湖面に姿を浮べつゝ　手足を休めて振り返り
モンキーの來るを待ち居たる　漸く龜に縋りつき
兩手に甲を抱へつゝ　命辛々從いて行く。
龜は直樣水中を　潜りて深き海底に
一端息を休めつゝ　再び湖面に浮き上り
忽ち變じて船となる　命限りのモンキーは
初めて蘇生したるごと　心も勇み氣も勇み
救ひの船に身を任せ　善惡邪正の判斷に
心の闇を照しつゝ　船のまに〳〵浪の上
朱欄碧瓦の龍宮の　高樓目蒐けて　惟神
神のまに〳〵辷り往く。

遠淺の湖岸に船は進んで來た。湖底は水晶の如く明かに、金砂銀砂の光太陽に映じて、何物にも譬方なき麗しさ。小さき青、赤、紫の魚は金魚のやうな尾を掉つて縱横に潑溂として游いで居る。天の星の輝くやうに水の深さ五寸乃至一尺許りの所になりて、金剛石のやうな光り五六尺或は一二尺を隔てゝ目も眩む許り强き光を放つて

居る。船は一寸許りの水の上さへも輕々しく辷りつゝ、遂に金砂の磯端に着いた。

モンキーは船を飛び下り、砂原を歩みかけた。一歩一歩運ぶ毎に足の下から鶯のやうな聲が出て來る。振り返つて砂に印した足跡を見れば、大なる小判を敷いたやうに金色に光つて居る。モンキーはふと佇み、乘り來し船や湖面を見れば、青、紅、紫、白、黄、橄欖色、其他得も言はれぬ寶玉、湖上三尺許りの所を蝶の花に戯る如くに前後左右に浮動して居る麗しさ、玉と玉とは時々衝突して花火の如き光を湖面に投げて居る。恰も寶玉の粉末を撒き散らしたやうな眺めであつた。モンキーは夢では無いかと我と我身を疑ひつゝ尚も湖面を熟視して居ると、後の方より思はず兩方の肩をグッと抱へた者がある。何者ならんと我胸の邊に目を轉ずれば、金色、黑色のダンダラ條のある虎の兩手であつた。モンキーは其手を我兩手に固く握り乍ら、何者にか引かるゝ如き心地し、自分の姿は何時の間にやら、紫の麗しき木の葉の數多茂れる林の中に導かれ、瑠璃光の如き岩石の根下に穿たれた岩窟の中へ、不知不識に進み入るのであつた。

モンキーは、如何なる事の有りとも、理智を捨てゝ、唯惟神に任すべく、決心の臍を固めて居た際であるから、一切の考慮を捨て、唯我身の自然に引かるゝまゝに任して居つた。

モンキーの體は、金銀色の光輝く洞穴の中を自然にキリ〳〵舞ひ乍ら何處ともなく聞ゆる音樂の聲に從れて時々舞ひ上り、或は横になり、或は逆樣に手を以て歩むなど、全く一身心魂を神に任せて、何時の間にか其身体は美はしき寶玉もつて飾られたる寶座の上に端坐して居た。坑内の遥向ふより、青、赤、紫、白、黄の五つの玉の光

サーチライトの數千倍の光力をもつて、目も眩む許り此方に向つて光を放射し出したモンキーは思はず目を塞ぎ、玉の光る方を眺むれば豈圖らんや、紫の玉の中には初稚姫、赤き玉には玉能姫、青き玉には玉治別、白き玉には久助、黄色の玉にはお民の顔があり〳〵と映つて居た。モンキーは是を見るより忽ち精神宙に浮き上る如く前後も知らず其場に倒れて仕舞つた。

（大正一一、七、一〇、舊閏五、一六、加藤明子錄）

第一一章　風聲鶴唳（七五七）

蒼空一點の雲なく、星光疎にして中秋の月は中空に懸り、鏡の如き温顔をもて下界を照し給ふ。地恩城の棟に鏤めたる十曜の金紋は、月光に映じて目も眩きばかりであつた。

地恩城の女王黄龍姫は、梅子姫、蜈蚣姫、左守神のスマートボール、宇豆姫を始め右守神の鶴公、貫州、武公其他を從へ、高殿に登り月見の宴を開いて居た。果實の酒は芳醇なる香を放ち、柑子、バナ、、桃其他の木の實を麗しき器に盛り、一同歡を盡して月光を仰ぐ折しも、黄龍姫は忽ち顔色蒼白ざめ、身体頻りに動搖して、心中不安の雲に包まれし如き容態となつて來た。

梅子姫、其他の人々の目には、中秋の月皎々と輝き、紺碧の空は愈高く、風は涼しく何とも云へぬ氣分に包まれて居る。獨り黄龍姫の眼に映じたるは、ジヤンナ郷のテールス姫の夫となり、三五の道をネルソン山以西に布き、旭日昇天の勢ありと稱せらるゝ友彦を先登に、數多の鬼の如き土人、怪しき黒雲に乘り、幾十萬とも限りなく鋭利なる鎗を携へ、中空より地上を眺め、黄龍姫の頭上に向つて鋼鐵の矛を驟雨の如く降らせ、火の車を挽き連れ、青、赤、黒の鬼、虎皮の褌を締め、牛の如き角を生やし攻め來る恐ろしさに、身体忽ち震動して、高殿より終に顚落し、人事不省に陷つて了つた。

蜈蚣姫は驚いて物をも言はず、老の身も甲斐々々しく階段を降つて行く。されど梅子姫、スマートボール其他の面々には黄龍姫の姿並に蜈蚣姫の姿は依然として高殿に月を賞するかの如く見ゆて居た。それ故蜈蚣姫の周章て階段を降り行きし事も、黄龍姫が高殿より墜落せし事も夢にも知らなかつた。要するに、黄龍姫、蜈蚣姫の本守護神は、依然として此高殿に其儘の体を現はし、嬉々として月を賞しつゝあるのであつた。二人が身体に殘れる執着心の鬼の爲めに斯くの如き幻覺を起し、又其罪惡の凝固より成れる肉體は、副守護神の容器として高殿の下なる千仞の谷間に突き落されて仕舞つたのである。

跡に殘つた黄龍姫の姿は、恰も鼈甲の如く身体半ば透通つて一層の美を加へ、言葉も俄に涼しく且つ莊重を帶びて來た。

梅子姫『黄龍姫様、不思議な事があるもので御座いますな。今迄の貴女のお姿とうつて變り、一入立派な御顏色、お身体の恰好までも、何處とならく威嚴の加はつた様に

思ひます。變ると言つても、斯う迅速に向上遊ばすと言ふ事は、不思議でなりませぬ」

黄龍姫「ハイ、妾は勿体なくも三五教の神司となり、且地恩城の女王と迄上りつめ、稍得意の色を泛べ安心の氣にうたれて、勿体なくも月の大神様を玩弄物か何かの様に酒肴を持ち出し月見の宴だと、花見か雪見の様な畏れ多い事を何とも思はず始めましたが、忽ち大空の月光菩薩の御威勢に照され、ハテ、濟まない事をした、妾は今こそ飛つ鳥も落す様な威勢で斯うして此處に安樂に暮して居るが、月の鏡に妾の古き傷がスッカリと寫つた様な心持になり、月見どころか、穴でもあらば這入り度い様な心持になり、悔悟の念に苦しむ時しも、滿天の星は黒雲に包まれ月光は影を隱し、四面咫尺暗澹となりしと思ふ間もなく、ジャンナの郷に三五の道を傳ふる友彦は妾が昔彼に與へた凌辱の怨みを復さんと數多の鬼を從へ、天上より鋼鐵の矛を雨の如くに降らせ、火の車を以て我肉体を迎へ來る其恐ろしさ。罪にかたまつた肉体の衣を神様の御恵に依つて剝ぎ取られ、又母上も子の愛に溺れ給ふ執着心の衣は、此谷間に落ちて白烟となり消え失せました。ア、斯くなる上は最早我々の肉体には一點の雲霧も無く、正に此中秋のお月様の如き身魂と生れ變つた様で御座います。それに就いては皆様、只今より月見の宴を廢し、神様にお詫を致しませう」と物語る。

梅子姫は感じ入り、自ら導師となつて高殿に端坐し、月光に向つて感謝祈願の神言を奏上し、月見に用ゐたる總ての器を此高殿より眼下の谷底目蒐けて一品も殘らず投げやり、今後は決して月見の宴を爲さゞる事を神明に約し、悄然として地恩城の奥殿に

姿を隠し、再び一同打揃ひ天津祝詞を奏上する事となつた。

地恩城の黄龍姫を始め、重だちたる幹部は奥殿に入り、祝詞を奏上し了つて神酒を頂き居る際、慌しく奥の間目掛けて駈入り來る貫州、武公の兩人は、息も絶え〳〵に後鉢巻グッと締め、各自茨の鞭を握つた儘

兩人『申し上げます。タ、、、大變で御座います。御用意を遊ばしませ』

と息もつき敢ず、泣聲になつて言上する。

スマートボール『其方は貫州、武公の兩人、大變とは何事だ。苦しうない、近く寄つて細さに物語つたが宜からう』

貫州は兩手にて胸を打ち乍ら、稍反身になつて

貫州『我々兩人、地恩城の城門を、スマートボールの命令により數多の部下を監督し、用心堅固に守る折しも遙に聞ゆる鬨の聲、何事ならんと高殿に一目散に駈登り、月の光に照らして向ふをキッと眺むれば、十曜の紋の旗印、瓢箪形の馬標は幾十百とも無く樹々の間に〳〵出沒し、赤鉢巻に赤襷、數多の駒に跨りて鬨を作つて攻め寄せ來る、其勢の凄じさ。敵は何者ならんと斥候を放ち、よく〳〵見れば豈圖らんや、曩に城外に投げ出されたる、元のバラモン教の友彦、ジャンナの荒武者共を引率れ、黄龍姫に嚴談せんと呼ばはり乍ら、猛虎の勢にて攻め來る。味方は薄帛綾錦、數万の敵軍は甲冑に身を固め小手脛當、鋭利の武器を携へ乍ら旗鼓堂々と攻め寄せ來る物々しさ。貫州、武公の兩人は、味方の奴輩殘らず驅り集め、寄せ來る敵に向つて言霊戰を開始し、天の數歌謠ひ上げて兩手を組み、指頭より五色の霊光を發射し敵の魔軍に向つて防ぎ戰へ共、彼も強者、言霊を以て應酬し、其上鋭利なる

武器を携へ、時々刻々に近寄り來る危さ。日頃無抵抗主義の地恩城なれども、斯くなる上は最早詮なし、武器に代へて所在小石を引掴み、押し寄せ來る敵軍に向つて雨霰と亂射すれば、敵は雪崩をうつて一二丁ばかり一旦ドッと引き上げしが、又もや鬨を作つて、暴虎憑河の勢恐ろしく、口より火焔を吹き乍ら、青、赤、黑の鬼神共先登に立ち、雷の如き怪聲を放ちて攻來る。味方は僅に三百有餘人、死力を盡して挑み戰へども、敵は名に負ふ大軍、瞬く間に縱横無盡に薙立てられ、無念ながらも我々兩人、敵を斬り拔け漸く此場に立ち歸り候程に、此處に御座あつては御身邊危し、一時も早く裏門より、山傳ひにシユオン山の方面指して落ち延び給へ。サア早く〳〵」

と身を慄はし、左右の手を打ち振り〳〵注進に及ぶ其怪しさ。スマートボールは合點往かず

スマート「只今まで高殿に於て月見の宴を催し居たりし我々、敵の押寄せ來る氣配あれば何とか神界より御示しあるべき筈、扨ても合點の往かぬ事である哩。……もうし黃龍姫様、梅子姫様、如何思召し給ふや、合點の往かぬ兩人が注進」

と二人の顏を打ち守り、稍不安の面持にて胸を躍らせ居る。黃龍姫は悠揚迫らず

黃龍姫「あいや、スマートボール、……貫州、武公の兩人を我前に伴ひ來れ」

と嚴命した。スマートボールは兩人の手を引き乍ら、黃龍姫の膝下に導いた。二人は頭を垂れ、猫に追はれし鼠の如く畏縮して慄ひ上つて居る。

黃龍姫「あいや、貫州、武公兩人、只今汝が注進せし事は過去の出來事なりや、將た未來の事なるか、但は現在の事か、明瞭に答辯せよ」

武公「ハイ、過去の事や未來の出來事ならば我々は決して斯樣な心配は致しませぬ。既に城内の者共は殆ど滅亡致し、我々兩人も斯くの如く顔に手疵を負ひし以上は、只今の事、今や……アレ〳〵あの通り間近くなつた聲、人馬の物音、今に友彦、鋼鐵の矛を打振ひ此場に攻寄せ來りますれば、何卒一時も早く裏門より逃げ延び下さいませ」

黄龍姫「あいや、スマートボール、其方は表門に行つて實否を調査し來れ」

スマートボールは「ハイ」と答へて立ち上らんとする。貫州は其裾を掴んで

貫州「モシ〳〵左守神樣、お待ち下さいませ。衆寡敵せず、飛んで火に入る夏の虫、決して惡い事は申しませぬ。……黄龍姫樣、早く〳〵御用意遊ばしませ」

梅子姫「今武公の言葉におひ〳〵近づく関の聲、人馬の物音と申したが、天地は至つて靜寂、何の聲も無いではありませぬか」

武公「ソ、、そりや何を仰有います。あの聲が分りませぬか」

と顔色替へて落ち付かぬ氣に、震ひ〳〵答へる。

スマートボールは貫州の手を振り放し。一目散に表門に現はれ見れば、月は皎々と輝き猫の子一匹其邊に見られぬ。「ハテ不思議」と高殿に登り四方をキツと見渡せば、山はコバルト色に蒼ずんで一點の白雲もなく、山の尾の上の輪廓は一入瞭然として、淋しき中に得も言はれぬ雅味を漲らして居る。スマートボールは悠々として奥殿に歸り來り、二人の前に立現はれ、矢庭に平手を以て貫州、武公の横面を二つ三つビシヤ〳〵と打つた。二人は初めてポカンとした樣な面を曝し

兩人「ヤア……これは〳〵不躾千萬にも女王樣の御殿に何時の間にか侵入致し、實に

申し譯なき事で御座います。何卒お許し下さいませ」

と平伏する。

蜈蚣姫「ほんに〳〵、妾の荒肝を取りかけよつた。お前は一体何と言ふ事を言つて來るのだ。大方夢を見て居つたのだらう」

兩人「ハイ、今考へて見ますれば夢の連續的行爲で御座いました。あんまり友彦が出て來る〳〵と心配をして居つたものですから、ドエラい夢を見たので御座いませう……あゝ惟神靈幸倍坐世」

と兩手を合せ

兩人「マア〳〵夢で結構で御座いました。……皆さん、お目出度う、お祝ひ申します」

黃龍姫、梅子姫、宇豆姫一度に吹き出し

「ブツブ、、、、オホ、、、」

錦の外には皎々たる明月輝き松虫、鈴虫、蟋蟀、螽蟖の聲は賑しく聞ゆて居る。

（大正一一、七、一〇、舊閏五、一六、北村隆光錄）

第一二章　不意の客（七五八）

心の鬼に責められて
黄龍姫が其昔
年も二八の花盛り
大の男を素氣無くも
錫蘭島の山奥に
義理も情も荒男
淋しき閨の友彦を
酒に醉はせて籠抜の
憂目に會はせた古疵は
女王となりし今日までも
心の奥に蟠かまり
惱み苦み居たりしが
空澄み渡る中秋の
月の光に照らされて
棄てた男の心根を
思ひ浮べて矢も楯も
耐らぬ計り苦しみの
雲に包まれ怖ろしく
空を眺めて居る内に
天空俄にかき曇り
數多の鬼を引率れて
鋼鐵の矛の雨降らす
友彦幕下の鬼共が
影に戰き千仞の
谷間に忽ち顚落し
續いて母の螟蛉姫
黄龍姫を救はんと
階段降り踏みはづし
同じく谷間に顚落し
罪を償ふ谷の底
ヤレ恐ろしや〳〵
昔の罪の廻り來て
根底の國に落ちたるか
天地の神よ友彦よ
妾の罪を赦せよと
祈る折しも秋風に

吹かれて落ち來る一葉の
入るよと見れば夢醒て
梅子の姫や諸人と
此正夢に小糸姫
神の御前に手を合せ
月見の無禮を謝し乍ら
神の御前に太祝詞
息せき切つて駈來り
誠しやかに宣りつれば
スマートボールを門外に
紅花の吾眼にヒラ〳〵と
仰げば元の高殿に
月の光を浴び居たる
愈〳〵此處に三五の
月光菩薩に心より
奥殿深く進み入り
宣れる折しも貫州が
夢の中なる出來事を
黄龍姫は怪しみて
遣はし偵察せしむれば
敵の攻め來し影もなく
四邊隈なく照り渡る
貫州、武公が胸の中
疑心暗鬼を生み出し
轉迷開悟の物語
天井の桟を數へつゝ
頬張り乍ら述べて行く
進むにつれて不思議なれ
御靈幸倍坐しませよ。

月の光は皎々と
黄龍姫を始めとし
まだ晴れやらぬ黒雲に
我と我手に惱みたる
横に臥しつゝ瑞月が
形も圓き餡パンを
黄龍姫が物語
嗚呼　惟神　々々

不意の客

地恩城の城内の廣場の木蔭に、貫州、武公の大將株を始め。門番其他一同、芝生の上に身を横たへ、或は坐りなどして雑談に耽つて居る。

門番のマールは貫州に向ひ、

マール　『モシ〳〵、ポールさん（組長の意）、此間は友彦の軍勢がやつて來たそうですがどうなりましたかなア』

貫州　『お前の貫州する所でない。マールで屋氣樓の樣な話であつたよ』

マール　『貴方の黄龍姫樣への御報告は、マールで夢の樣だつたと言ふことですが、夢にしても大袈裟なことですな』

貫州　『俺ばつかりだない。武公でさへも同じ夢を見たのだから、貫武一途だよ。どうしても嘘とは思へないものだから報告に及んだのだ。併し乍ら俺達は、黄龍姫樣の御夢の上を案じ煩ひ奉つて居る忠臣だから、貴樣の見る夢とは、稍選を異にして居るのだ』

マール　『選を異にして居られるから、戰爭の夢を御覽になり、戰々恟々として戰況を御報告なさつたのですなア。……武公さん、貴方も本當に其んな夢を見たのですか』

武公　『俺は別に夢を見たと云ふ譯ではないが、常々そんな事が在りはせぬかと、案じて居つた矢先き、貫州さんが周章しく話されたものだから、俺も夢か現か知らぬが、ツイ捲き込まれて報告に往つたまでだ。併し輕信報告（敬神報國）の至誠の發露だから、黄龍姫樣も別にお咎め遊ばさず、マア無事で事濟となつたやうなものだ』

マール　『そんなら是から貴方等兩人に對し、屋氣樓ポールと云ふ尊名を奉ることにしませうかい。……のうミューズ』

ミューズ「オウそれが宜からう。蜃氣樓と云ふやつは、少しくどんよりとしたようなハッキリせぬ空に、空中樓閣が出來たり、松林が出來たり、人馬の往來する有樣が映つて來るものだ。何時も春夏の頃になると、ネルソン山の上の方に蜃氣樓が現はれ、色々の立派な女神の姿が見えたり、中には鬼や大蛇の姿が現はる、事がある。大方貫州さんは夢ではなくて、其蜃氣樓を眺め、ビックリして本眞物ぢやと思つて報告したのだらう」

貫州「俺は自轉倒島から此處へやつて來たものだから、空中にそんな物が現はれると云ふ事は、話は聞いて居るがまだ見た事はない。一遍見たいものだなア」

アール「此龍宮島にはスワの湖と云つて、立派な金銀の砂を以て湖底を固めた樣な綺麗な廣い水溜りがあり、其處に龍神さんや澤山の女神さんが現はれて、色々の事を遊ばして御座る姿が、時あつて天上に映じ我々國人を驚かし給ふ事が度々あるのだよ。併し乍ら近年は如何したものか今迄の樣に、そう度々現はれなくなつた。大方ネルソン山を向うに越えた秘密鄕へ、鼻曲りの友彥が往つたものだから、龍神さんが怒つて諏訪の湖の底深くお隱れ遊ばし、色々の神業を御中止になつて蜃氣樓が現はれないのかも知れない。本當に龍神さんも友彥の爲めに、蜃氣樓一轉を遊ばしたのかも知れないよ。アハ、、、」

貫州「オイ向ふを見よ。噂をすれば影とやら、鼻先の赤い出齒の圍栗眼の、友彥に似た奴が綺麗な女を連れてやつて來るぢやないか」

武公「ヤア、ホンによく似た奴だ。然し彼奴はジャンナの鄕で非常な勢で鄕人にもてはやされ、殆ども、ネルソン山以西は友彥の勢力範圍になり、言はゞ黃龍姫樣に匹敵する

様な地位に迄進んだと言ふ噂だから、假令此處へ來るにしても、十人や二十人の供を連れて來るべき筈だ。鼻の曲つた奴は廣い世間には、二人や三人は無いとも限らぬ。よもや友彦ではあるまいなア」

貫州「ソレでも好く見よ。友彦に間違ひない樣だ。彼奴は今迄の地金を出しやがつて、ジャンナの鄕人に愛想をつかされ、居たたまらなくなり、テールス姫と手に手を取つて駈落と出掛け、地恩城へ救援軍を願ひに來たのか、但は居候に舞ひ込んで來居つたのに間違ひあるまいぞ」

武公「果して友彦だつたらどうする考へだ」

貫州「無論の事、寄つて集つて懲しめの爲め打ちのめすのだ。何程無抵抗主義の三五教と言ふても、あんな奴を門内に入れて耐るものか。黃龍姫樣に對し、どんな事を居るか分つたものでない。又黃龍姫樣も、あんな男が假令一年でも夫であつたと、人に思はれては恥かしいと御氣を揉まれるに定つて居る。それに又嬶アを連れて來て居るから、そんな事が分らうものなら又もや悋氣の角を生やして、どんな騒動をおつぱじめるか分らないから、兎ち角此門内に一歩たりとも入れてはならぬ。先年の樣に放り出して仕舞うに限る」

話合ふ所へ、夢でもなく現でも屋氣樓でもなく、本當の友彦はテールス姫と只二人スタ〳〵と此場に近づき來り

友彦「ヤア貫州さん、武公さん、久し振りで、御機嫌宜しう」

貫州「ヤア矢張り貴樣は友彦だな。日頃の地金を出しやがつて、又候土人の奴に愛想をつかさし、ノツ〳〵と遣つて來たのだらうが、此城門は我々の勢力圏内に置かれて

ある關所だから、通す事は罷りならぬ。折角だがトットと歸つて呉れ」

友彦「左樣で御座いませうが、今日の友彦は今までの体主靈從の友彦と違ひますから、御心配なく通過させて頂きたい」

テール「モシ〳〵、ボールさん、此んな奴は絶對に通す事は出來ませぬなア」

貫州「オウさうだ。金輪際通す事は出來ぬ。諦めて歸つたがよからうぞ」

友彦「其御疑ひは御尤もながら、吾々はジャンナイ教を立替へ、大慈大悲の三五教の教を立て、今日の所大變な勢力になりましたので、同じ一つ島に於ける神樣の御道、黄龍姫樣に一切を報告し、其部下に使つて貰ひ、全島を統一して頂かうと態とに供をも連れず、女房のテールス姫と只二人遙々參りました。どうぞ黄龍姫樣に御面會叶はねば、強つてとは申しませぬ。左守神樣迄會はして頂きたう御座ります」

テール「ヤイ〳〵友彦、供も連れずにやつて來たと今言つたが、友に供が要るかい。テールス姫だとか言つて、妙なアトラスの如うな面した女房が、それ程有り難いのか。鼻の赤い奴や、顏の班に赤い奴が勿体なくも地恩城にやつて來て、左守神樣に御面會を願ひたいとは、そりや何を戯けた言を吐くのだ。チット貴樣、面と相談して見ろ」

テールス姫「友彦さん、サーチライス地恩城、エッブッブ、エッバ〳〵、バーチク〳〵、イッパーパー」

と土人語で囀つて居る。此意味は……友彦の救世主を、地恩城の門番神、譯も分らずに我々を輕蔑して入門を拒絶して居るが、決して躊躇に及ばぬ、ドシ〳〵這入りませう……との意味であつた。友彦は

友彦『貫州、武公其他の方々、話は後で分りませう。兎も角左守神に御面會の上……』

と言ひ乍らテールス姫の手を引き、表門に向つて進み行かんとする。

貫州、武公は

両人『コリヤ大變だ、貴樣を入れてなるものか……』

と言ひながら、マール、ミユーズ其他の人々に目配せした。マールを始め一同は友彦の後より追ひ縋り、寄つて集つて二人を其場に突き倒し、踏む、蹴る、殴く、殆ど半死半生の目に遭はせた。友彦夫婦は少しも抵抗せず、一同が打擲する儘に身を任せ、両手を合せて感謝祈願の祝詞を奏上して居た。一同は餘り友彦夫婦が從順なるに、少しく小氣味惡くなり、友彦の言葉につれ、貫州、武公始め一同は、大地に蹲踞み乍ら聲を揃へて、感謝祈願の祝詞を唱へて居る。

右守神の鶴公は門内の木蔭を逍遙し居る折しも、門外に當つて大勢の祝詞の聲が聞たのを訝かり乍ら、聲を尋ねて表門を潜り、門前の密樹茂れる鬱き林に立出で、一同の姿を認めて此處に現はれ來りて、友彦が大勢の中に交りて祝詞を奏上するを見て大いに驚き、無言の儘、踵を返し奥殿深く黄龍姫の前に進み此由を委曲に報告した。

黄龍姫は驚くかと思ひの外、ニッコリとして

黄龍姫『右守神殿、友彦が御入來になつたとやら、お供の方はいづれ澤山お在りでせうな』

鶴公『ハイ、別に供らしき者は御座いませぬ。見慣れぬ女の方が只一人、大方噂に高きテールス姫でせう』

黄龍「ハテ不思議な事もあるものだ。あれ丈け勢力を得たる旭日昇天の友彦さんが、供をも連れず夫婦連お越しになつたとは、一体どうした譯だらう」

鶴公「私の察する所、友彦さん、又例の地金を現はし、士人に愛想をつかされ夫婦手に手を取つて、此處へ命からゞ〳〵逃げ來られたものと思はれます。如何致したら宜しう御座いますか。御指圖を願ひます」

黄龍「決して〳〵左樣な事で御入來になつたのではありますまい。妾は少し心に當る事がある。兎も角オーストラリヤに於ける三五教の太柱、敬意を拂ふ爲めに、黄龍姫外にお迎ひに參りませう」

鶴公「右守神として申上げます。苟も地恩城の女王たる御身を以て、輕々しくお出で遊ばすは御威勢にも關りませう。どうぞ此事計りは御中止を願ひたう存じます。私がお迎へ申して參りますから、どうぞ奥殿にお待ち下さいます樣にお願ひ申します」

黄龍姫は首を左右に振り

黄龍「イエ〳〵、同じ天地の分靈、人間に上下の區別はない。又今、友彦樣はヂャンナの郷の國人を主宰する立派な御方とお成り遊ばし、妾は地恩城の女王とまで成つて居るのも、淺からぬ因緣でせう。假令一ケ年でも夫婦となつた間柄、お迎ひ申上げねばなりますまい」

と蜈蚣姫、梅子姫の此場に在らざるを幸ひ、自らスタ〳〵と門前に現はれ、友彦が端坐する傍に寄添ひ

黄龍「妾は地恩城の黄龍姫、昔の小系姫に御座います。友彦樣並びにテールス姫樣」

アどうぞ妾と共に奥殿にお進み下さいませ」

友彦は此聲にフト見上ぐれば、昔の面影アリ〳〵と顔の何處やらに殘つて居る小糸姫であつた。……友彦はハッと頭を下げ恭しく兩手をつき

友彦「これは〳〵女王樣、勿体ない斯樣な所迄お出で下さいまして、……これなるは私が女房、テールス姫と申すもの、今は熱心な三五教の信者として、友彦が神務を力限り輔助致すもので御座います。申上げたき事は山々御座いますが、然らば奥殿にて悠々と申上げませう」

テールス姫「女王樣、初めてお目にかゝります。何分宜しくお願ひ致します」

と友彦に連れられ、黄龍姫の後に從いて門内深く姿を隱した。右守神の鶴公は不承無性に三人の後に從ひ行く。貫州、武公其他一同は、夢か現か幻かと、互に顔を見合せ呆れて再び言葉もなく、空行く雲をアフンとして眺めて居る。

（大正一一、七、一〇、霞関五、一六、谷村眞友録）

瑞　月

へだてなき神の御稜威に生ひ乍ら隔てありとぞ思ふ愚さ
惡しとは思ふな我に仇なすは我を錬ふる神の御心
眞直なる心は魔世に出づる人のまことの神德なりけり

第四篇　神花靈實（一三）

第一三章　握手の涙（七五九）

天恩豐な地恩城
木々の木の葉は麗しく
衣食の道に身をもがく
天恩郷を立ち出でゝ
闇の友彦後にして
小糸の姫の行先を
三十路に餘る男の頃の
行方求めてバラモンの

春秋冬も夏景色
果物豐に實りつゝ」
難みも要らぬ一つ島
錫蘭島に立て籠り
大海原を渡り來る
鵜の目鷹の目つけ狙ひ
島に渡りて彼方此方と
道を聞きし友彦が

時の力に助けられ
命の瀬戸の海中に
小豆が島に名も高き
遇ふた嬉しさ恐ろしさ
捕手の者に縛られて
東助夫婦の情にて
水泡と消ゑて釣小舟
馬關の關の浪を越ゑ
命危き折からに
玉治別の一行に
蜈蚣の姫に邂逅ひ
堅磐常磐に浮びたる
國城山の岩窟に
洲本の庄の酋長が
何の言ひ譯淡路島
犯せし罪もうたかたの
清、武、鶴の三人と
千引の岩に船をあて
三五教の神司
惜しき命を救はれて
蜈蚣の姫や高姫の
南洋一の龍宮に
小糸の姫の生の母
何の云ひ譯荒浪を
オースタラリヤの浮島に
命辛らゞ上陸し
地恩の城に來て見れば
手も無く叩き出されて
黄龍姫の宿の夫
悦ぶ間もなく夢醒めて
漂着したるアンボイナ
上陸すればコハ如何に
蜈蚣の姫に再會し
乘り切り〳〵沓島や
蜈蚣の姫の一行と
小糸の姫の住ひたる
情を知らぬ國人に
傍の林に潜みつつ
嬉し〳〵の再會を
四邊を見れば岩の上

腰の骨さへ打ち碎き　身動きならぬ悲しさに
漸く息を休めつつ　三五教の神言を
赤心籠めて宣りつれば　神の恵は忽ちに
身もすく〳〵と山の上　尾の上へ傳ひてネルソンの
峰の頂上に辿り着き　後振り返り眺むれば
一望千里の雲の奥　地恩の城は何處ぞと
眼を見張りつゝ憧憬るゝ　時しもあれや烈風に
吹き捲くられて友彦は　風にゆられて鷹鳶の
翼無き身は如何にせん　ジャンナの郷に墜落し
人事不省の折柄に　此地に住める怪人は

不思議と傍に立ち寄りて　よく〳〵見れば昔より
待ち焦れたる救世主　曲りながらも赤鼻に
喜び勇み雀躍りし　ジャンナイ教の本山に
檐ぎ歸りし面白さ。　ジャンナイ教の神司
テールス姫に思はれて　茲に夫婦の新枕
月日を重ね往くうちに　三五教の感化力
ジャンナの光にゆき渡り　三五の月の御教は
朝日の昇る勢で　四方に擴がり榮え行く
友彦夫婦は意を決し　地恩の城に神徳の
花を開かす黄龍姫　御許に到り其昔

蜈蚣の姫や小糸姫
深き罪をば詫んとて
事情細かに物語り
得たる嬉しさ夫婦連れ
暫しの暇を告げながら
其眞心ぞ雄々しけれ
神の御幸を蒙りて
母娘の前に手をつきて
三五敎の柱石と
清き尊き物語

母娘の者を惱せし
テールス姫に來し方の
漸く妻の諒解を
ジヤンナの鄕の人々に
伴をも連れず入り來る
あゝ　惟神　々々
前非を悔いし友彦が
心の曇を晴らしつつ
仕へまつりし古き世の
神と神との御水火より
組み立てられし瑞御靈
粗製濫造の蓄音器
不整調なるレコードの
あゝ　惟神　々々
黄龍姫や友彦の
繼の縺れの糸口を
宜らせ給へよ天津神
彦の命の御前に

神の使の瑞月が
把手に撚をかけながら
いよ〳〵回轉始めける。
御靈幸倍ましまして
搦みあうたるローマンス
サラリ〳〵と淀みなく
國津御神や大八洲
愼み敬ひ願ぎまつる。

友彦夫婦は、小糸姫に誘はれ奥殿深く進み入つた。友彦の來訪を聞いて胸躍らせた

蜈蚣姫、スマートボールやその他の一同は、珍らしさと忌はしさの混乱したる如き面持にて、中腰になりながら現はれた。黄龍姫は友彦の手を固く握り、二三回揺ぶりながら

黄龍姫「ジャンナーサール、ウツポツポ、サーチライス、友彦、テールス、テールスヘーム、ターブリンス〳〵、ケーリスタン、イジアン、ノールマン、シールンバーユ「ヘーギエル、シユライト」

と云つた。此意味は

「ジャンナの郷に天降りました友彦の救世主よ、妻のテールス姫殿、御無事で御神業によく仕へて下さいました。妾も貴方の今迄の態度を改め、誠の道に御活動遊ばすを仄に聞き、愛慕の念に堪へず、何とかしてお便りを聞き度いものだ。又神様のお許しあれば一度會見をして、今迄の御無禮を謝し、互に了解を得て御神業に参加したく思ふて居りました。能くまア御遠方の處遙々お入來下さいました」

と云つた。（これから解り易いやう日本語を用ふ）

友彦「ハイ有難ふ御座います。鬼熊別様、蜈蚣姫様の御兩親に對し、若氣の至りとは申しながら、天にも地にも一粒種の貴方様を、惡魔のために我精神を魅せられ、あのやうな不都合な事を致しました私の罪を、お咎めも下されず、唯今の御親切なる打ち解けたる御挨拶、實に痛み入りました。私は過ぎ來し方の御無禮を思ひ出す度に神の光に照らされて、五体をぐた〳〵に神様から斬り虐まれるやうな苦痛を感じ、寢ても覺めても居られないので、恥を忍び直接女王様に拜顏を得、心ゆく迄お詫を申上げ、且つお恨みのありたけを酬ふて貰ひ、さうして自分の罪を赦され、至粹至

純な元の御魂に立ち歸り、安心して御神務に奉仕したく存じまして、女房にも事情を打ち明け、態とに供人も召し連れず、昔の友彦となつてお詫に參りました。何卒今迄の御無禮を、神直日大直日に見直し聞き直し、お赦し下さらん事を、偏にお願ひ致します」

と涙をハラ〳〵と流し、眞心より詫び入るのであつた。黄龍姫は

黄龍「ハイ有難う御座います。罪は却つて私に御座います。お慈悲深い神様に何事もお任せ致しまして、正しき清き御交際をお願ひ申上げます」

と心の底より打ち解ける其殊勝さ。友彦は一同に向ひ歌を詠んで挨拶に代へた。

友彦「沖に浮べる一つ島　地恩の城に現れませる
神威輝き天地の　惠も開く梅子姫
三千世界に神德の　限なく照らす黄龍の
姫の命を始めとし　母とまします蜈蚣姫
泥にまみれし世の中を　スマートボールや宇豆の姫
千歳祝ぐ松の世の　梢に巣ふ鶴公の
右守神の御前に　神の教の友彦が
赤き心を打ち明けて　居並びたまふ三五の
司の前に敬いて　言解き詫し奉る
朝日は照るとも曇るとも　月は盈つとも虧くるとも
假令大地は沈むとも　誠の道は何時迄も
變るためしもあら尊と　教の御子と選まれて

ミロクの神の神業に
仕ふる我等の頼もしさ
此世を造りし神直日
心も廣き大直日
唯何事も人の世は
直日に見直し聞き直し
身の過ちは宣り直す
神の尊き言靈の
庇ひも知れぬ御恵
我人共に大前に
廣大無邊の神恩を
畏み感謝し奉る
あゝ惟神々々
御靈幸倍ましまして
地恩の城は永久に
朝日の豐榮昇るごと
榮に〳〵て果も無く
輝き渡る天津日の
御陰蔭りネルソンの
山の彼方の國人を
一人も殘さず三五の
神の恵に救ひ上げ
野蠻未開の魔の郷を
開きて進む神の德
東と西に分れたる
ネルソン山の頂きに
立たせ給ひて黄龍の
姫は雄々しく此島の
救ひの神と現れませよ
我は友彦テールスの
姫と力を合せつつ
汝が命の神業を
助けまつりて永久に
國治立大神の
仁慈無限の御心に
酬ゐまつらん村肝の
心撓まぬ桑の弓
射貫かにや止まぬ鐵石の
胸打ち明けていつ迄も
固き心を誓ひ置く

あゝ惟神々々
御靈幸倍ましませよ」

梅子姫は總代的に立ち上つて祝歌を謠つた。

梅子姫『無限絶對無始無終
ゝゝゝうまらに委曲に造りたる
仁慈無限の御心を
殘る隈なく與へんと
心を千々に配らせつ
百の神達千萬の
草の片葉や鳥獸の
心を配り給ひつつ
仰ぐも高き大宇宙
國治立大神は
三千世界の萬有に
遠き神代の昔より
天津神達國津神
青人草や海川や
小虫の末に至る迄
大海原に漂へる
泥の世界を清めんと
高天原のエルサレム
三五教の御教を
神の最初の出現は
人の歴史の初まりは
オリバス神を禮拜し
波斯の國ではミスラスの
高砂島の國人は
神の初めのエルサレムは
祀ると云へど其元は

清き御魂を幸はいて
此處を聖地と定めつつ
四方に開かせ給ひけり。」
珍の都のエルサレム
埃及國を元となし
印度の國はクリシユナ
神を伊仕へ南米の
クエルザコール禮拜す
國治立大神を
清き流れのイスフエル

自轉倒島に現れませる
バラモン教やウラル教
教と云へど人の世の
其名を異にするのみぞ
過ぎし昔はバラモンの
其根本に立ち歸り
心も廣き大直日
姫の命の靈の裔
姫の命と現はれて
「いとも尊き御惠に
神の教も皆一つ
ウラナイ教やジャンナイの
風土や人情に劃されて
黄龍姫も友彦も
神に仕へし身なれども
此世を造りし神直日
國治立や豐國の
埴安彦や埴安の
教を四方に開きます
如何で隔てのあるべきや
「いよ〳〵茲に三五の
四方の國々島々を
此世を救ふキリストの
十字の架を背に負ひて
天教地教の山の上に
其神德の一滴
名に負ふ珍の一つ島
郷に比すべき地恩郷
珍の眞秀良場永久に
教の御子の友彦が
神の教に天の下
殘る隈なく統一し」
神業清くミロク神
ノアの方船操りつ
世人を救ふ神の業
此處に濕り龍宮の
メソポタミヤの天恩の
青垣山を繞らして
治め給へる黄龍姫
心の底より打ち解けて

東と西を隔てたる　ネルソン山の青垣を
苦もなく茲に打ち拂ひ　名詮自稱の一つ島
一つ心に眞實を　籠めて仕ふる神の道
三千世界に限もなく　一度に開く梅子姫
心も勇み身も勇み　父大神が三五の
清き御旨に叶ひつつ　教の道の永久に
開け行くこそ尊けれ　あゝ惟神々〳〵
御歳幸倍ましまして　天は地となり地は天と
變る艱難の來るとも　地恩の郷に三五の
嚴の御柱彌高に　瑞の御柱永久に

顯幽揃ふて樹つ上は　如何で搖がん國治の
立の尊の御仰せ　心清めて朝夕に
仕へまつれよ諸人よ　神の惠は天地と
共永久に變らまじ　あゝ惟神々〳〵
御靈の幸を吸へかし」

と謠ひ終つて、茲に自出度く友彦は黄龍姫と再會し、麻柱の至誠を捧げ、東西相和し相助け、友彦は黄龍姫の忠實なる部下となつて大神の大道を、全島に力の限り擴充する事となつた。いよ〳〵一同打ち揃ひ、神前に例の如く祝詞を奏上し、宣傳歌を謠ひ終り、十二分の歡喜に滿たされて一日各自の館に歸り、友彦夫婦は貴賓として鄭重なる待遇を受け、數日城内に滯留する事となつた。」

（大正一一、七、一二、舊閏五、一七、加藤明子錄）

瑞　月

照妙の綾部の里に錦織る人は眞の神の御柱
弓張りの月を頭にいただきて高熊山に登る神人

第一四章　園遊會（七六〇）

オーストラリヤの一つ島は、現在は殆ど夏許りなれども、此時代は僅かに春夏秋冬の區別がついて居た。日中は年中殆ど同じ暑熱であつたが、朝夕夜間の氣候には自然に四季の區別を現はして居た。

我國で言へば殆ど晩夏の頃、城外の天を封じて立てる老樹の、蓮近に生茂る馬場に於て、友彦夫婦の爲めに大園遊會が開かれた。四面山に包まれたる地恩郷は、平地としては全島に於ける第一の高地であつた。谷川は南北を流れ、崎嶇たる岩石、谷々に壁の如く突つ立ち、奇勝絶景並ぶものなき景勝の地であつた。

一つ嶋に於ける景勝の地は、第一に諏訪の湖、第二にヒルの郷のクシの瀧壺の近邊

に指を屈するのであつた。されどヒルの溪谷は區域最も狹くして、平地は殆ど無く、地恩鄕に對して、其大小廣狹の點に於て比べものにならなかつた。土地高く風清く、且つ面積廣く、大樹鬱蒼たる點は、全島第一と稱せられて居た。

門外の廣場の森林には、所々に赤、白、黑、青、紅等の面白き形したる岩石、所々に地中より頭をもたげ、一見して大なる花の地上より咲き出でたる如く思はれた。岩石の大部分は蓮華の花の咲き出でたる如き自然形をして居る。國人は單に之を蓮華岩と云ひ、或は蓮華の馬場とも名づけて居た。

黃龍姫以下數百人の人々は、右往左往に、思ひ〳〵の遊戯をなし、歌ふ、踊る、舞ふ、岩笛を吹く、石を拍つ、二絃琴、三絃琴、三絃琴の音嚠喨として響き、横笛、縱笛、警盤などの聲は最も賑しく、思はず身を天國にのほせ、妙音菩薩の來りて樂を奏する如き感に打たるゝのであつた。

梅子姫は中央の最も高き紫色の蓮華岩に登り、面白き歌を唄つて興を添へた。

梅子姫「芙蓉山と聞わたる
木花姫の御身魂
皇大神の統御ゆる
四方に間配り大入洲
島根の國の眞穗良場や
下津磐根の蓮華臺
神の敎に國人の
匂ひ出でたる地恩鄕
天敎山に現れませる
一度に開く梅子姫
皇御國のスの種を
數ある中に自轉倒の
青垣山を繞らせる
芙蓉山の御移寫
心も開く蓮葉の
蓮華の花の此處彼處

咲き亂れたる其臺
貴の御子たる入乙女の
三千世界の神人を
教の稜威も高天の
月の御神の御惠の
大海原の波分けて
天津御國に昇る如
母と現れます蜈蚣姫
メソポタミヤの天恩鄕
清き響を流したる

神の教を麻柱ひし
開き初めたる梅子姫
招き集ふる此齋場
原に坐ます日の御神
水火をば受けて黃龍姫
雲を起して久方の
御稜威畏き神司
豐葦原の中津國
エデンの河と諸共に
パラモン教の神司

鬼熊別の片柱
誠の道に救はんと
埃及國や波斯の國
布かせ給ひし雄々しさよ。
天の太玉神司
天恩城に出でまして
うまらに妥曲に宣りつれど
鬼雲彥の荒神は
雲を霞と自轉倒の
率ゆる人も大江山

天地四方の神人を
大國別の御言もて
印度の國まで教線を
父大神の神言もて
エデンの河を打渡り
天津誠の御教を
天運未だ循環來ず
神の心を慮り兼ね
島に渡らせ玉ひつゝ
稜威の砦を構へ立て

教の花の開く樣
北と南にバラモンの
同じ天地の珍の子と
神の司に迫はれまし、
歸り玉ひし痛ましさ
此世を造りし大神の
百の神人草木迄
誠の道に敵もなく
小さき意地に搦まれて
種々雜多と名を替へて
みくにケ嶽や鬼ケ城
教の射場を造りつゝ
生れ出でたる三五の
再び波斯の本國へ
アヽさり乍ら〳〵
惠の露は天地の
漏れ落ちもなく窮ひて
味方の差別もなき世をば
右や左や北南
荒び居るこそ悲しけれ。

轉迷開悟の蓮花
松の神代のめぐり來し
心合せし一つ島
教を開く嬉しさは
歡ぎ遊べる如くなり。
御靈幸はひまし〳〵て
心の空に月は照り
國治立大神や
此有樣を詳細に
歡ぎ玉ふか白雲の
愈〳〵開く常磐木の
敵と味方の區別なく
地恩の鄕に三五の
高天原に手を曳いて
アヽ惟神々々
一度叛きし友彥が
輝き亘る今日の宵
神素盞嗚大神の
眺め玉へば如何ばかり
包む谷間ぞ床しけれ。

科戸の彦や科戸姫　御靈幸はひまし〳〵て
地恩の鄕や我々が　心を包む雲霧を
一日も早く吹き拂ひ　天國淨土の眞相を
宇宙主宰の大神の　御前に示し奉らなむ。
神は我等と俱にます　親子兄弟睦び合ひ
此樂園に神國の　春を樂む一同の
花も開きし蓮華臺　堅磐常磐の岩の上に
千代も八千代も萬代も　榮ゑませとぞ願ぎまつる
ア、惟神々々　御靈幸はひましませよ」

と謠ひ終つて、紫の蓮華岩を下り來り、芝生の上に息を休めた。

蜈蚣姫は稍くの字に曲つた體を搖ぶり乍ら、兩手を擴げて手付き面白く、剛の水浸き然として唄ひ踊り始めた。

蜈蚣姫「豐葦原の瑞穗國　根分けの國と傳はりし
メソポタミヤにパラモンの　足場を作り天が下
世界十字に踏みならす　蜈蚣の姫の身の果は
メソポタミヤを後にして　波斯を越ゑて印度の國
大空翔ける磐船に　身を任せつゝ自轉倒の
島に渡りて彼方此方と　教を開き黃金の
玉の所在を探らんと　思ひし事も水の泡
阿波の鳴門や淡路島　生命の瀨戸の海越ゑて

小豆ケ島や南洋の
男瀧女瀧に身を浴し
洋を渡りて進み來る
ニユージランドの玉森に
波を辷りて此島に
神の立てたる三五の
來りて見れば我娘
老の眼もうるみなく
敎の光久方の
天降りましたる朝日子の
龍宮島のアンボイナ
浪路も遠き太平の
船脚早く沓の島
一度息を休めつゝ
着くや間もなく地恩郷
敎柱の黃龍姫
小糸の姫の面影は
擬ふ方なき乙娘
天津御空の雲分けて
日の出神の御守り

金勝要大神が
天と地との神々の
安々送る老の身の
さはさり乍ら白雲の
夫の命は黃龍の
未だ知らずにましまさむ
空漕ぎ渡る鳥船も
今は用ふる術もなく
篤き心のあるならば
我等親子の喜びを
分靈の眞澄姫
其懷に抱かれて
心に懸る雲もなし
彼方に遠き波斯の國
姫の命の今日の樣
翼なき身は如何にせむ
皇大神の警告に
空行く雲の我爲に
一日も早く夫の邊に
一日も早く傳へかし

遠く四方を見渡せば　霧に隠れし地恩郷
何の目的も梨礫　鳩の使の片音信
執着心の曲鬼を　伊吹戸拂ひに打拂ひ
速川の瀬に清めんと　心に覺悟は定め乍ら
忘れ難きは恩愛の　止むる由なき我涙
梅子の姫よ友彦よ　テールス姫よ宇豆姫よ
スマートボール、鶴彦よ　其他並居る教子よ
神の眞道に入り乍ら　心もつれし我姿
眺めて笑うて下さるな　道は道なり親と子の
情は世界の始めより　今に變らぬ玉椿
千代も八千代も永久に　動かぬものと神直日
見直しまして何時迄も　我等親子を親子とし
堅磐常磐に道の爲　盡させ玉へ　惟神
神の御前に久方の　天津祝詞の聲清く
仕へ奉らむ蜈蚣姫　ア、惟神々々
神に誓ひし教子よ　教を守るピユリタンよ」

と齒の抜けた口から、不整調な言葉にて謡ひ終り、蓮華岩の上に腰を打下し、ホツと息を吐いた。續いてスマートボール、宇豆姫、鶴公其他の歌は數多あれども、山鳥の尾の餘り長々しければ略しておきます。

黄龍姫以下幹部は、園遊會を切りあげて表門を潜り、各居室に姿を隠した。貫州、

武公、マール、ミューズ其他の連中は、後に殘りて酒に醉ひ、クダを卷き、解放的氣分になつて、彼方に五人、此方に三人と、木蔭に足を投げ出し、芝草をむしり乍ら雜談に耽つて居る。マールは口を縺れさせ乍ら

マール「モシ〳〵、貫州のボールさん……螟蛉姫さんも昔はバラモン教の立派な大將株で、終局にや海洋萬里の自轉倒島まで玉を探しに往つたり、宣傳をされたり、三五教を目の敵の樣に敵對うて御座つた癖に、自分の娘が三五教の神司、地恩城の女王さんになつたと思つて、俄に心機一轉し、三五教を此上なき結構な教の樣に思つて御座るのは、チツと可怪しなものですな。梅子姫さんに、最前の樣に耳の痛い歌を謠はれて、何とも思はず、自分も立つて踊り狂ひ、妙な歌を謠はしやつたが、一体全体何の態だ。俺やモウ胸糞が惡くて、三五教にお仕へするのも厭になつて來た。……貫州さん、今日限りお暇を頂戴して、又元の土人の仲間へ還元しますから、どうぞ惡からず御承認を願ひます」

と卷舌になり、フーフと酒臭い息を、貫州に吹き掛け乍ら、覗き込む樣にして詰寄つた。

貫州「神樣の道の信者にはイロ〳〵と徑路があるものだ。惡いと思へば直に改良するのが、所謂惟神の道だよ。貴樣の樣な一本調子で、神樣の信仰が出來るものか。要するに神の道は理智に依つてかたづけようと思つても駄目だ。信入も悟入も、左旋も右傾も、消極も積極も、一寸見た所では大變に懸け離れて居る樣だが、實際は皆一体だ。何方から入信つた所で、落着く所は天地創造の元の神樣を信仰するのだ。所謂江南の橘は江北の枳殼だ。バラモン教であらうが、三五教であらうが、誠の道

に二つはない。畢竟人間の考へに依つて種々の雅號を附けたり、勝手な障壁を拵へて威張る丈のものだ。蜈蚣姫さんの……我々は……態度に就いては大贊成だよ。貴樣もそこまで理窟を言ふ樣にならば、最早信仰の門口には入つたのだ。宅の女房の名がお竹でも、お松でも別に變りはないぢやないか。お竹の名がお松にならうと、お松の名がお梅にならうと、人間其者はチッとも變りがないと同樣に、神樣は一株だから、よく考へて見て、其上に去就を決した方がよからうぞ。バラモン敎と云ふも三五敎と云ふも、但はジャンナイ敎と云ふも、ウラル敎も、敎を傳ふる人間の解釋に依りて、深淺廣狹の區別が付くまでだ。兎も角深く廣く、入り易く、愉快な敎を信仰して、其日々々を安心立命して行くのが、神の敎を信ずる信者の本領だ。モチッと話してやりたいが、そうヅブロクになつて居ては、折角の高論卓說も貴樣の耳には這入るまい。先づ酔が醒めてから、悠りと說明するから、明日の事にせう」

マール　「何だか知らぬが、チッとばかし、氣に喰はなくなつて來たのだ。そんなら明日改めて聞かして貰はうかい」

と行歩蹣跚として、目も霞み、右の腕で兩眼を横にツルリと撫で、鼻をツンとかみ乍ら、あつちやに寄つたり、こつちやへ酔つたり、八人脚になつて門内へよろめき入る可笑しさ。一同は手を拍つて「ワッハ、、、、」と笑ひ轉げる。

紺碧の空は俄にドンヨリとして來た。ネルソン山の峰を壓して、天空高く現はれ來る異樣の女神七八人、瞬く間に朱欄碧瓦の神殿現はれ、數多の人々の影、手に取る如く天空に筍の生ねた如く、ボツリ〳〵と現はれて來た。

武公は初めて此屋氣樓を眺め、「アッ」と驚き、黄龍姫に注進せむと、轉けつ輾びつ

あつちやへヨッたり、こつちやへヨッたり、八人連れの歩みをし乍ら、奥深く姿を隱し、一同は天を仰いで、蜃氣樓の立派なるに打驚き、園遊會の餘興だと、興がつて居る。

武公の注進に依りて、黄龍姫、梅子姫其他の最高幹部は高殿に上り、ネルソン山の頂上より此方に向つてパノラマの如く、チク〳〵と位地を轉じ來る、諏訪の湖の蜃氣樓を熟視すれば、數多の女神に手を引かれ、左守神たりし清公其外四人連れ、何事か神勅を受け居る姿を眺めて、一同は手を拍つて驚喜し、直に天に向つて天津祝詞を奏上した。蜃氣樓は益々明瞭に、且つ左右に長く展開し、湖面に浮ぶ白帆まで判然と映つて來た。黄龍姫は蜃氣樓を見て言靈の歌を歌ひ始めた。

黄龍姫「アふけば高し久方の　イ域の空に現はれし
ウヅの宮居の蜃氣樓　エにある樣な姫神の
オホ空高く現はれて　カミの御前を伏し拜み
キヨき正しき太祝詞　クモ井に高く詔りあげし
ケ色は殊に美はしく　コバルト色の山の上を
サし登りたる清公の　シロき銀容珍の衣
スワの湖影清く　セマり來れる地恩城
ソラ高々ヒ現はれぬ。　タカ天原の神の國
チ五百萬の神人の　ツキ添まつる崇高さよ。
テニ手に玉を携へて　トコ世の空を打眺め
ナガき影をば和田の原　ニシや東や北南

ヌりたる如き空の色　ネ底の國まで照り渡る
ノゾミも遂げて神人が　ハナの顏容月の眉
ヒダり右りの侍女は　フジの額に雪の肌
ヘグりの山のそれの如　ホホベも春の花の色
マナコ涼しく眉濃く　ミダれ髮さへ顏に垂れ
ムツビ合うたる神と人　メグり大足神の世の
モモの花咲く彌生空　ヤ千代の君を壽ほぎて
イヅミも清き湖の底　ユウに言はれぬ麗しさ
エに見る如き光景は　ヨにも稀なる眺めなり。
ワが言靈の清ければ　井づくの空も澄み渡り

ウきつ沈みつ行雲の　エらぎ榮ゑて永久に
チサまる御代を守れかし。　あゝ惟神々々
御靈幸はひまし〳〵て　左守神と仕へたる
心の空も清公が　地恩の城を後にして
身を下したるタカ港　屋根無し船に搖られつゝ
ヒルの港に漕ぎつけて　谷間に荒ぶ曲津靈を
言向け和しセーランの　山の麓を踏越ゑて
露の枕も數重ね　一望千里の玉野原
嚴しき暑熱を浴び乍ら　進み進んで諏訪の海
湖邊に漸く辿りつき　天津祝詞を奏上し

身禊拂ひてスク〳〵と
湖中に浮び漂へる
轉迷開悟の教の花
天女の如く淨化して
朱爛碧瓦の高殿に
今目のあたり見にけり
神の惠に隔てなし
雲を拂へば天津日の
三五の月を包みたる
科戸の風に拂はれて
水兒のみづの魂となり
男島女島に助けられ
咒いて散りて實を結び
黄金の船に迎へられ
導かれたる有樣は
あゝ惟神々々
心の空に寒がれる
光は清く照り渡る
八重棚雲も忽ちに
圓滿清朗望の月
天垂る地垂る海に垂る
一二三四五つ六つ
百千萬の神達の
妾もいかで此儘に
空しく月日を過さんや
心を清め魂研き
神の集まる龍宮の
天火水地と結びたる
自轉倒島に宮柱
鎭まり居ます大神の
盡きせぬ神の御惠は
人の身魂にたり充ちて
七八九つ十の空
守りも深き龍宮嶋
地恩の鄕に悠々と
いざこれよりは村肝の
清きが上にも清くして
諏訪の湖へと立向ひ
珍の寶を拜戴し
太しき建てゝ永久に

御前に捧げまつりなば　三五教の礎は
云ふも更なり天が下　四方の國々永久に
黄金世界を造りなし　貴き神の功績を
堅磐常磐に現はさむ　三五教の人達よ
天に輝く盛氣樓　神の姿を目のあたり
眺めし上は如何にして　安きを貪る時ならむ
一日も早く片時も　妾と共にネルソンの
高嶺を越えて西の空　虎狼や鬼大蛇
醜の曲津の猛ぶ野を　神の光りを身に浴びて
安々進み行かんとす　早々用意召されよ」……と

促す姫の一言に　蜈蚣の姫を始めとし
スマートボールや梅子姫　宇豆姫、友彦伴ひて
テールス姫も諸共に　旅裝を整へしづ〳〵と
地恩の城を後にして　身裝も輕き簑笠の
露押し分けて進み行く　あゝ惟神々〳〵
御靈幸はひましませよ。

（大正一一、七、一一、舊閏五、一七、松村眞澄錄）

第一五章　改心の實（七六一）

黄龍姫、梅子姫、友彦、テールス姫、蜈蚣姫の五人は共に、地恩城を後に數百里、山路を越えて玉野原の諏訪の湖の、龍宮城に進むことゝなつた。後には左守神スマートボール夫婦を始め、右守神鶴公、貫州、武公、マール、ミューズの幹部連をして留守師團長とし、草の蓑、竹の小笠の輕き扮裝、タロの木の枝をつきながら、岩石起伏せる羊腸の小徑を上りつ下りつ、谷を飛び越え谷間を傳ひ漸くにして、ジャンナの友彦が割據せる郷に着いた。

鬼の樣な荒男、赤銅の樣な顏に青い黥を、顏一面に彩りし者を先導に、老若男女が六ケ敷い顏して黄龍姫の一行を『ウワーく』と鬨の聲を擧げ乍ら歡迎した。書狗暗き森林に包まれたる此郷は、一見鬼の樣な人種許りであるが、至つて質朴で且つ正直で、信仰心に富んで居た。曲つた鼻の赤い友彦を、天來の救世主と仰いで、尊敬した程の郷人は、天女の如き黄龍姫、梅子姫の玉を欺く清き姿を眺めて、天の河原よりネルソン山に鳥船に乘じ天降り給ひしを、ジャンナの郷の救世主友彦夫婦が奉迎して歸りしものと固く信じ、一齊に砂糖屋の十能見た樣な、大きな黑い手を擴げ土人『ウワポッポく、オーレンス、サーチライス、ターレンス、チーターく』と叫び乍ら歡迎の意を表した。此意味は

『神樣か　天の御使か、但は吾等を救ふ光明の神か、實に立派な大救世主が、此郷に御降り遊ばした。吾々は最早如何なる惱みに遭ふこともなく、永遠無窮に天國淨土の樂みを味はうことが出來るであらう。木の實は豐に實のり、皷腹擊壤の惠みに浴す

る事は火を睹るより明瞭だ。有難い、勿體ない、貴い、嬉しい、吾々郷人は力の限り心の極みを、此生神樣に捧げねばならぬ」

と言ふ事である。……ジヤンナの郷の救世主と仰がれたる友彦は、郷人に向ひ

友彦「ターリスト、テールターイン、ハールエース、オーレンス、サーチライス、カーテル、ライド」

と叫んだ。此聲に一同は大地に平伏し嬉し涙を流して歡喜した。友彦は又もや、

友彦「ハール〳〵」

と手を擧げて叫ぶや、大勢の土人は一行を手車に乘せ、三五の神を祭りし稍廣き舘の中に、御輿を擔ぐ樣な鹽梅式で何事か分らぬ事を喋り乍ら奥深く送り行く。

黄龍姫一行は友彦の舘の奥深く招かれ、色々珍らしき果物を饗應され、且つバナ、の味に舌鼓打ち乍ら、一二日此處に逗留し、郷人に對して黄龍姫、梅子姫よりバプテスマを施し、宣傳歌を敎へた上、數十人の郷人に送られ、一行五人は漸くにして玉野ケ原の廣場に無事安着することゝなつた。

途々木の實を喰ひ、谷水を飲み、芭蕉の葉を褥となし乍ら、猛獸、大蛇の群に言靈を授け歸順悅服させつゝ、愈此處に金銀の砂輝く廣野ケ原に現はれた、一行は、訪諏の湖の畔に建てたる小さき祠の前に端坐し、天津祝詞を奏上し、傍の椰子の樹の森に一夜を明かすことゝなつた。

エスタン山の後方を覗いて現はれたる大太陽は、諏訪の湖水の魚鱗の波に映じ、金銀の蓆を敷き詰めたる如く、其麗しさ譬ふるにものなく、一行五人は湖水に身體を清め、七日七夜此處に禊を修しつゝあつた。

早や夕陽も傾いて得も言はれぬ麗しき鳥の聲、塒を求めて各〳〵密林に歸り行く。純白の翼の大鳥は暗を縫うて低く黄昏時より現れ來り、湖面を縱横無盡に翱翔し初めた。其數幾千萬羽とも數へ難く、月無き夜半も明るき許りになつて來た。是は信天翁の祖先でアンボリーと言ふ大鳥である。

一行五人は椰子の樹下に身を潜め、天津祝詞を奏上し夜の明けるを待つた。夜明けに間近くなつたと思ふ時しも、頭上にバタ〳〵と鳥の羽ばたき激しく聞ゑて來た。見れば兩翼長き三丈ばかりのアンボリー、椰子の樹上にとまつて、一同の頭を被うて居た。それが夜明けに間近くなつたので一時に立ち上つた音である。一同は鳥の飛び行く方面を目も放たず打見守れば、ほんのりと薄紅くうす白く大空を染ながら、際限もなき大原野を西北の空を指して、一羽も殘らず飛去つて仕舞つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

ジャンナの鄕の三五の　神を祀りし友彥が
館に一行夜を明かし　一日二夜を逗留し
タイヤ、ブースを始めとし　數多の土人に皇神の
誡の道を說き諭し　鎭魂やバプテスマ
一人も殘らず施して　賞尙暗き森林の
小徑を傳ひ鄕人に　賑々しくも送られて
漸くセムの谷間に　辿り來れる折柄に
黄龍姫は皇神の　珍の命の靈借りて
送り來りし鄕人に　厚く言葉をかけながら

東と西に別れつゝ
重ねて此處に玉野原
勇み進んで諏訪の湖の
祠の前に跪坐して
訪ね來りし神恩を
湖水に身をば浸しつゝ
椰子樹の蔭に身を潜め
樹上に聞ゆる羽ばたきの
雪を欺く白翼の
空を封じて數多く
露の枕も數多く
金銀輝く途の上
邊にやう〳〵安着し
一行五人が安穏に
感謝し終り清鮮の
七日七夜の魂洗ひ
夜明けを待てる折柄に
音に驚き眺むれば
パッと開いた大鳥の
西北指して飛んで行く。

一行五人は空中を
黄金の翼に乘せられて
四五の神人悠々と
其光景の崇高さに
祝詞を唱へつ眺め居る
男女五人の神人は
北に向つて進み行く
初稚姫や玉能姫
神の御言を畏みて
傳へ導く神の業
仰ぎ見つむる折もあれ
此方に向つて飛び來る
湖水を目掛けて降り來る
五人は思はず手を合せ
黄金の鳥に乘せられし
波の上をばスレ〳〵に
これぞ玉治別神
久助お民の五人連
貴の教を限もなく
うまらに委曲に宣り了せ

改心の實

玉依姫の御使の　　黄金色の靈鳥に
救はれ御空を翔りつゝ　　歸り來られる生神の
通力得たる姿なり　　嗚呼　惟神　々々
神の教の尊けれ。

翼を一文字に擴げた金色の靈鳥は、神の使の八咫烏であつた。玉治別一行を乘せた五羽の八咫烏は、日光に照り輝きて中空にキラリ〳〵と光りを投げながら、地上までも金光を反射させ、諏訪の湖邊に飛び來り、紺碧の波の上を辷つて際限もなき湖水を、北へ〳〵と進み行くのであつた。

梅子姫、黄龍姫は飛び立つばかり此姿を見て驚き且つ喜んだ。一行の胸の内は譬へがたなき崇高にして且壯快の思ひが漂ふたからである。

友彦「黄龍姫、樣梅子姫樣、地恩城に於て園遊會の時、天空高く現はれた蜃氣樓の光景、紺碧の湖水現はれ、四方を包む青山の崇高なる姿は、今此湖面を見ると寸分の差も無い樣ですな。大方清公、チヤンキー、モンキー等の、女神に導かれ結構な御用を仰せつけられて居た所も、此聖地で御座いませうかなア」

黄龍姫「妾も夫れに間違ひないやうな感じが致します。昔から人跡絶ねしオセアニアの秘密郷、斯樣な立派な湖があらうとは、夢にも知りませなんだ。何とかして神樣の御力を借り、此湖水を渉つて見たいものです」

梅子姫「蜃氣樓で拜見した時には純白な白帆が澤山に航行して居ましたが、船は一隻も見ないぢやありませぬか。大方アンボリーの飛交ふ影が船のやうに見たのでせうかな」

友彦「サアさうかも知れませぬぜ。……黄龍姫様、船が無ければ渡る譯には行きませぬ。玉治別や初稚姫様の様に、黄金の鳥が迎ひに來て下さらば實に結構だが、船も無ければ鳥船もなく、未だ吾々は御神慮に叶ふ所迄身魂が磨けて居ないのでせう」

黄龍姫「神様は一點の曇りなき水晶魂でなければ、肝腎の神業には御使ひ下さいませぬ。折角此濱邊まで參つたものゝ、斯の如く三方は壁を立てた様な岩山、何程足の達者な者でも、鳥類でない以上は越す事は出來ますまい。然しながら此處まで無事に着いたのも全く神様のお恵み、此處でもう一層徹底的の心の修業を勵みませう。地恩城の女王だとか、ジヤンナの郷の救世主などゝ言はれて得意になつて居るのが、これが第一神様の御心に叶はないのでせう。同じ天地の恵みに生れた人の子、善惡美醜の區別はあつても神様の愛には、些つとも依姑最負はありますまい。こりやもう一つ身魂を立て直さなくては駄目でせうよ。勿體なくも神素盞嗚大神様の御娘御、梅子姫様を蔭の御守護とし、賤しき妾の身を以て地恩城の女王と呼ばれ、神司と言はれて勿體なくも直々の御血統の上位に立つて居たのは、恰度頭が下になり、足が上になつて居るやうな、矛盾撞着の遣り方であつた……ア、梅子姫様今迄の御無禮を何卒御赦し下さりませ。決して貴方を押込め私が上に立つて覇張らうなどゝ云ふやうな、賤しい心はチットも持つて居ませなんだ。然し乍ら名譽心に驅られ、本末自他公私の別を、不知不識の間に犯して居りました。貴方と我々は天地霄壤の懸隔がございます。尊卑の別も辨へず甚だ以て不都合の至り、今改めて御詫を仕まつります。さうして地恩城の女王たる地位を神様にお返し申し、生れ赤子の平の信者となつて御神業に奉仕し、貴女様を女王とも教主とも仰いで、忠實にお仕へ致しま

すから、不知不識の御無禮御氣障、何卒神直日大直日に見直し聞直し下さいますように、黄龍姫が眞心より御詫仕ります」

と涙を滝の如く兩眼より滴らし、悔悟の念に堪へざるもの、如く涕泣嗚咽終に其場に泣き伏した。梅子姫は嚴然として

梅子姫「黄龍姫どの、貴女は結構な御神德を頂きました。妾は神素盞嗚大神の生みの子と生れ、木の花姫の生宮として今日迄、貴女のお傍に身を下し、神業を輔佐して參りました。貴女の御言葉を今日只今迄、實の所は待つて居たのでございます」

と微笑を浮かべて曰りつれば、友彦は又もや兩眼に涙を浮かべ乍ら

友彦「私は生れついての狡猾者、到る所に惡事を働き紛れ當りに鼻の赤きを取柄にてジャンナの郷に持て囃され、救世主と呼ばれながら好い氣になり、心にも無き尊敬を受け、天來の救世主と化け濟まして居た心の汚さ、イヤもう塵芥に等しき吾等の身魂、どうして肝腎要の御用に御使ひ下さいませう。……何卒々々梅子姫様、貴女様より大神様に重々の罪御赦し下さいます様お取成し願上げ奉ります。又私は決して今後は、人様以上に結構な御用をさして頂かうとは、夢にも思ひは致しませぬ。如何なる事にても構ひませぬから、どうぞ神様のお綱の切れぬ様に、大神様にお詫の御取次偏に希ひ上げ奉ります」

梅子姫「貴方の心の園の蓮花、轉迷開悟と音を立て開き初めました。ア、好い所で改心して下さいました。これで梅子姫も父大神より命ぜられたる御用の一端が出來たと申すもの、私の方より貴方に對して感謝致します」

と嬉し涙を兩眼に浮かべ、述べ立つれば友彦は嬉しさ身に餘り、大地にひれ伏し顔も

得上げず、歡喜と悔悟の涙に咽び返つて居る。

蜈蚣姫は梅子姫の前に手をつかへ

蜈蚣姫「梅子姫樣、今迄の御無禮何卒々々お許し下さいませ。私は貴方樣の御存じの通り惡逆無道の限りを盡した、鬼婆々の樣な惡人で御座いました。地恩城に參りまして娘の出世を見るにつけ、不知不識に高慢心が起り、且つ愛着の念に驅られ、肝腎の大神を第二に致し、且つ貴方樣に對し、平素輕侮の目を以て向つて居りました心盲で御座います。地恩城に於て友彥が爲め園遊會を開いた折、貴方樣は紫の蓮華岩の上に立たせ給ひ、私の素性を歌つて下さつた時の私は、心の中にて非常な不滿を抱きました。今思へばあの時の御言葉の中には、大神樣の大慈大悲の救ひの御心……なぜ其時に私は氣が附かなかつたでございませう。森羅萬象に對し一切色盲の私、不調法ばかり致しまして神樣に對し、又貴き貴女樣に對してお詫申上げる言葉もございませぬ。どうぞ母子の者も憫み下さいまして、今迄大神樣に敵對申した深い罪を、お詫下さいますようにお願ひ申します」

ヒワッとばかりに聲をあげ泣き倒れる。

梅子姫は莞爾として

梅子姫「ア、蜈蚣姫樣、貴女は今日只今初めて誠の神柱になられました。結構でございます、どうぞ此後とても妾と共に三五の大神樣の御用に誠心誠意御盡力あらんことを希望致します。如何なる罪穢れ過も、梅子姫が代りて千座の置戸を負ひますれば、御安心下さいませ」

蜈蚣姫「有難うございます」

と言ふた切り、大地にかぶりつき有難涙に咽び入る。テールス姫は又もや梅子姫の前に兩手をつき

テールス姫「何分罪多き私、不知不識の御無禮お氣障が何程ございませうとも、何卒お赦し下さる樣、神界へ御願ひ下さいませ」

と合掌して賴み入る。

梅子姫「貴女は此中でも最も罪輕き、身魂の淸らかな神の子です。今日神界に對し差した る不敬法もございませぬ。今後も今迄通り過ち無き樣、神の御用に御奉仕あらんこ とを希望致します」

と答ふれば、テールス姫も梅子姫が慈愛の言葉に、有難涙を絞るのみであつた。

梅子姫は湖面に向ひ合掌しながら何事か暗祈默禱する事暫し、忽ち何處ともなく微妙の音樂聞ゆ、西北の空を封じて、此方に向つて一瀉千里の勢にて飛び來る以前のアンボリー、幾百ともなく翼を並べ、湖上目掛けて飛び返る其麗しさ、繪にも寫せぬ眺めであつた。

（大正一一、七、一一、舊暦五、一七、谷村眞友錄）

第一六章　眞如の玉（七六二）

梅子姫は湖面に向ひ手をさし伸べて二三回手招きするや、島影より純白の帆を風に孕ませ、金銀珠玉を鏤めたる目無堅間の神船は、金波銀波を左右に分け乍ら此方に向つて進み來る。船中には清公、チヤンキー、モンキー、アイル、テーナの五人が操縱し、櫓櫂の役を勤めて居る。梅子姫は清公に會釋し乍ら、物をも言はずヒラリと船に飛び乘つた。四人は恐る〳〵續いて船中の人となつた。清彦の一隊五人も、梅子姫の一隊五人も、目と目を見合し輕く目禮したまゝ一言も發せず、十曜の紋の十人連れ、靜に波を蹴立てゝ又もや吹き來る返し風に帆を孕ませ、紫色の樹木繁茂せる浮島を數多越え乍ら、海底金剛石の如く處々に光る麗しき光景に見惚れつゝ、雲を壓して建てる朱欄碧瓦の

樓門の仄近く見ゆる磯端に船は着けられた。

清公は一同に手招きし乍ら樓門の方に向つて案内する。梅子姫を先頭に蜈蚣姫、黃龍姫其他一同一列となつて、金光輝く平坦なる砂道を徐々と息を凝らして進み行く其靜けさ。樓門に進むや否や白衣の神人、門の左右に威儀を正して立ち、一人は大幣、一人は盧水を持ち、一行を一人々々大幣、盧水にて清め乍ら通過せしむるのであつた。

行く事數丁、青紫の樹木、庭園に疎に樹ち、黃、紅、白、紫、紺、赤、緋色の花は芳香を薫じ艶を競うて居る。漸く黃金を以て造られた中門の前に進めば、威儀嚴然たる白髮の神人、黃金の盥を一同の前に差し出し手洗を使はしめ、手洗の儀も相濟み、之よりは瑪瑙、しやこ等の階段を幾百ともなく登り詰め、山腹の眺望良き聖域に着いた。後振り返り眺むれば諏訪の湖水は金銀の波漂ひ、日光は湖面に映じて搖ぎ、白帆は右往

左往に蝶の如くに行き交ひ、大小の島々には色々の花咲き滿ち、恰も天國淨土も斯くやあらんと、一同は眼を据ゑて時の移るも知らず見惚れ居る。

暫時あつて漆の如き黑髮を長く背後に垂れたる妙齡の美人、皮膚濃かにして目許涼しく口許締り、薄絹の綾を身に着け、長柄の唐團扇を杖に突き乍ら、此方に向つて悠々と進み來る。十二人の神使は梅子姫一行の前に立ち現はれ叮嚀に會釋し、無言の儘、梅子姫には一人は前に、一人は後に、左右に二人侍りつゝ、奥庭目掛けて徐々と歩を運ぶ。八人の女神は黃龍姫以下に附き添ひ、無言の儘奥庭深く進み入るのであつた。

行く事四五丁、此處には白木造りの門が建てられて居る。中よりパッと戸を左右に開き現はれ出でしは初稚姫、玉能姫、玉治別、久助、お民の五人であつた。之亦無言のまゝ先に立つて、遂に一の飾も無き瀟洒たる木の香薫れる殿内に導き入れた。さうして、中央の寶座に梅子姫を招じた。梅子姫を中心に一行は半月形となつて座に着いた。

高座の白木の扉を左右に引き開け現れ出でし崇高無比の女神は、五人の侍女に天火水地結の五色の玉を持たせ乍ら梅子姫の前に現はれ給ひ、前に立てる侍女の手より、自ら紫の玉を手に取り上げ、初稚姫に渡し給ふた。初稚姫は恭しく拜受し、之を寶座に控へたる梅子姫の手に献つた。梅子姫は莞爾として押し戴き給ふ時、金襴の守袋を一人の侍女來りて献る。梅子姫は之を受取り直に玉を納め、其儘頸に掛け胸の邊りに垂れさせられ、合掌して暗祈默禱し給ふた。梅子姫の姿は刻々に聖さと麗しさを增し、全身玉の如くになつて居る。次に玉依姫は侍女の持てる赤色の玉を取り、玉能姫に相渡した。玉能姫は押し戴き、蜈蚣姫の手に恭しく渡す。次に玉依姫は侍女の

持てる青色の寶玉を取り、之を玉治別に授け給ふた。玉治別は押し戴き直に黄龍姫に渡した。次に侍女の持てる白色の玉を取り久助に渡し給へば、久助は恭しく拜戴し友彦の手に渡す。又侍女の持てる黄色の玉を玉依姫自らお民に渡し給へば、お民は押し戴きテールス姫に渡した。各一個の玉に對し金襴の袋は添へられた。さうして此玉の授受には玉依姫神を始め、一同無言の間に嚴肅に行はれたのである。

玉依姫は一同に目禮し乍ら奥殿に侍女を伴ひ、一言も發せず悠々として神姿を隱し給ふた。梅子姫外一同も無言の儘龍宮の侍神に送られ、第一、第二、第三の門を潛り諏訪の湖邊に着いた。

此時金の翼を擴げたる八咫烏十數羽飛び來り、梅子姫、黄龍姫、蜈蚣姫、友彦、テールス姫、玉治別、初稚姫、玉能姫、久助、お民の十柱を乘せ、天空高く揮き乍ら萬里の波濤を越えて、遂に綾の聖地に無事歸還した。

又銀色のアンポリーは湖邊に現はれ清公、チャンキー、モンキー、アイル、テーナの五人を各一人づゝ脊に乘せ、天空を翱り地恩城に送り屆けた。金色の八咫烏は、其儘肉體を分派し、數百千の斑鳩となり、神の御使として永遠に仕ふる事となつた。又地恩城に清公以下五人を屆けたるアンポリーは、地恩城の門前に降り來り、五人を三四間の中空より芝生の上に投げ下した。

折から月の光を仰ぎ眺め居たるマール、ミューズの二人は、アンポリーの姿を見て魔神の司と見誤り、長き竿を以て力限りに打ち拂ふた。五羽のアンポリーは羽翼を傷つけクウ〳〵と聲を立てゝ啼き乍ら、四邊の森林の木下闇に紛れ姿を隱した。

之よりアンポリーを信天翁と言ふ。阿呆拂ひになつたと言ふ俚諺は、此因緣に基く

のである。

梅子姫、黄龍姫、蜆蚫姫の自轉倒島に立ち去られし後の地恩城は、暫時清公司を「して當主と仰ぎ、鶴公を左守神となし、チヤンキーを右守神となし、又ジヤンナの郷はスマートボール、宇豆姫の夫婦之を管掌する事となつた。さうして清公の發起により、地恩城内の最も風景好き高地を選んで高殿を造り、一つ嶋の國魂神眞澄姫神を鎭祭し、飯依別神をして宮司となし、久木別、久々別を添へて永遠に奉仕せしめた。三五教の教は清公之を主管し、且全島を統一して國民を永久に安泰ならしめたのである。あゝ惟神霊幸倍坐世。

（大正一一、七、一一、舊閏五、一七、北村隆光錄）

第五篇　千里彷徨（一三三）

第一七章　森の囁（七六三）

黄金の玉を紛失し、高姫に追放されて、オセアニヤの一つ島に玉の所在を探らんと艱難辛苦を冒して立向うた黒姫は、夫高山彦と共に、一つ島の酋長格となり、數多の土人を手なづけ、一時は武力を以て東半分の地に勢力を扶植しつつあつた。

其處へ小糸姫、五十子姫、梅子姫、今子姫、宇豆姫の容色端麗なる美人現はれ來り、土人の崇敬殊に甚しく、高山彦、黒姫も之れを排斥するの餘地なきを悟り、扳目なき兩人は直に猫を被つて小糸姫が部下となり、遂には心より小糸姫に悅服し、地恩城にブランジー、クロンバーの職を務め、二年三年一意專心に玉の所在を、土人を以て搜索せしめつつあつた。されども玉らしき物は何一つ手に入らず、殆ど絶望の思ひに

沈む時、高姫其他の一行が此島に來るに會し、最早本島に用は無し、假令オセアニヤ全島を我手に握る共、三千世界の寶たる三つの神寶には及ぶ可らず。躊躇逡巡せば、又何人にか寶玉の所在を探られんと、高姫、黑姫、高山彦は、日頃手撫づけ置きたるアール、エースの二人を引連れ、稍廣く大なる樟製の船に身を任せ、タカの港を秘かに立出で、後白浪と漕ぎ出す。

やう〳〵にして太平洋の波濤を横斷り、數多の島嶼を經ふて馬關を過ぎり、瀬戸の海に歸還し、淡路の洲本（今の岩屋邊り）に漸く船を横たへた。

高姫を先頭に一行五人、洲本の會長東助が館を指して進み行く。見れば非常な宏大なる邸宅にして、表門には二人の門番阿吽の仁王の樣に嚴然と扣へて居る。よく〳〵顔を眺むれば、生田の森の杢助館に於て出會した虹公、蜂公の兩人であつた。

高姫「オヽお前は虹公、蜂公……如何してマア泥坊がそこまで出世をしたのだ。日の出神の御入來だから、一時も早く館の主東助殿に、日の出神御光來だと報告をしてお呉れ」

と横柄に命令する樣に云ふ。

虹公「此頃は御主人はお不在で御座いますから、何人がお入來になつても、此門を通過さしてはならないと言はれて、斯う我々兩人が嚴重に固めて居るのだから、日の出神さんであらうが、假令國治立尊樣であらうが、通す事は罷り成りませぬワイ。主人の在宅の時は門番は誰も居ないのだが、主人は一寸神樣の御用で、何々方面へ御越し遊ばし、其不在中に戸惑ひ者……何々が四五人連でやつて來るから、決して入れてはならぬぞ。若し我命令を破つて門内に通す樣な事があつたら、其方は直に

暇を吳れる。そうすれば貴樣も虻蜂取らずになつて了ふぞよ……と厳しき御命令だ絶對に通す事はなりませぬ。……なア蜂公、さうぢやないか」

蜂公「さうだ、國依別さんが生田の森からお迎へにお出でた時、鷹姫とか、鳶姫とか、烏姫とか、黒姫とか云ふ奴がキッと此館へゴテ〳〵言うて來るに違ひないから、一度でも顔見知つた虻公、蜂公を門番にして置くがよからう……と云つて、東助さんと相談の上、臨時門番を勤めて居るのだ。神樣と云ふものは偉いものだ。チャンと、日の出神樣のやうに、前に知つて御座るのだから堪らぬワイ。ソッハ、、、」

高姫少しく聲を尖らし

高姫「泥坊上りの虻蜂の分際として、此結構な神柱を鷹だの、鳶だの、烏だのと、何と云ふ口汚い事を申すのだ。大方言依別の奴ハイカラから聞かされたのだらう」

虻公「そんなこたア、如何でもよい。誰が言つたのか知らぬが、世界中知らぬ者はありますまい。つい此近くに結構な玉が隠してあるのに、オースタラリヤ三界まで飛んで行くと云ふ羽の強いお前共だから、鳥に譬られても仕方があるまい。グヅ〳〵して居ると、國依別や東助さんが玉の所在を嗅出して、又お前さんに取られぬ樣にと寶の埋換を遊ばすと見た、何でも立派な玉が聖地へ納まるから、お迎へとか、受取りとかに行かはりました。お前さんの居らぬ間に聖地には……噂に聞くと、何でも近い内、五色の玉が納まると云ふ事、それなつと受取つて、又お前さんに隠さしたら、チッとは高姫、黒姫の病氣も癒るだらうと、國依別さんが笑ひ半分に言つてましたよ。アハ、、、」

黒姫「あの三つの御寶を、言依別が又埋けなをすと云ふのか。エーエ胸がスイとした。

初稚姫の様な小チッペや、玉能姫なぞが末代の御用たしたと思つて……三十萬年未來までは何と仰有つても申し上げられませぬ……なんて威張つて居つたのが……思へば〳〵可憐らしいわいの。……それはさうと言依別の奴ハイカラ、クレ〳〵と猫の目程精神が變るのだから、今度は又國依別のヤンチャや、船頭あがりの東助に御用をさすのらしい。コリヤうつかりとしては居られますまい。……サア虹、蜂の御兩人、そこまで聞いて居る以上は、モッと詳しい事を御承知だらう。お前さんは中々正直者だ。それでこそ御神業が勤まると云ふもの、サア私と一所に聖地へ歸り樣子を偵察して、末代の御神業に仕へませう。其代り此高姫、黒姫の御用を聞けば、立派な御出世が出來まする。宜しいかな、分りましたか」

と三歳兒をたらす樣に、甘つたるい聲を出して抱き込まうとする。

蜂公「グッ〳〵して居ると、國依別が肝腎の御用をしますで、早う御歸りなされ。惡い事は言ひませぬ……（小聲）と斯う言うて門を潜らさん樣に、追ひまくる樣にする俺の計略だ」

と小さい聲で呟くのを、高姫は耳敏くも、半分計り聞き取り

高姫「コリヤ門番の古狸奴が、黒姫さんはお前にチヨロまかされても、世界の大門開きを致す日の出神の生宮は、東助の門番位に誤魔化されはせぬぞ。默つて聞いて居れば何を言ふか分つたものぢやない。察する所、家島（繪島）か神島あたりに隱し置いたる三個の寶玉を、我々が遠い所へ往つたのを幸ひ、ヌックリと取り出し、初稚姫や玉能姫に揚壺を喰はし、此館に言依別、國依別、東助が潜んで、玉相談をやつて居る事は、日の出神の天眼通にチヤンと映つて居るぞ。どうだ、虹、蜂、恐れ入つた

か」

虻、蜂一度に

「アヘ、、、、エライ日の出神さんだなア。何も彼もよう御存じだワイ」

高姫「定まつた事だ。世界見に透く水晶身魂の日の出神様の仰有る事に間違があつてたまらうか。……サア〳〵高山彦さん、黒姫さん、アール、エース、……虻、蜂兩人を取押へてフン縛り、我々は奥へ進み入つて、三人の面の皮を剝いでやりませう」

高山彦「高姫さん、コリヤ……一つ考へ物ですな。多寡が知れた、虻、蜂の門番、そんな秘密が分らう筈がない。グヅ〳〵して居ると、良い翫弄物にしられるかも知れませぬぞ」

高姫「そら何を仰有る高山さん、千騎一騎の此場合、チッと確乎なさらぬかいな。……黒姫さんも餘程耄碌しましたね」

虻公「俺を取り押へるの、フン縛るのと、そりや何を言うのだ。這入るなら這入つて見よ。危ない事がして有るぞ。忽ち神の罰が當つて、虻蜂取らずの目に會うても良けら、ドシ〳〵とお通りなさい……と云ひたいが、金輪奈落此門を通しちやならぬと云ふ嚴命を受けて居るのだから、表門は俺の責任があるから、入口は一所ぢやない。貴樣勝手に這入つたがよからうぞ。此前にやつて來たお前に似た樣な宣教師は厠の中からでも逃げ出たのだから、裏の方へそつと廻つて、厠の下から糞まぶれになつて這入らうと、這入るまいと、ソラお前の勝手だ。此門丈は、絶對に通る事は罷りならぬのだ。ウッフ、、、。……三つの玉とか、五つの玉とか、今頃には聖地は玉の光で美しい事だらうな。初稚姫さんも、玉能姫さんも、餘り慾が深過ぎるワ

イ。三つの玉の御用をし乍ら、今度又龍宮の一つ島で結構な玉を五つも手に入れて入恐鳥とかに乗つて歸つて御座るとか、御座つたとか云ふ無聲靈話が、瀕々と東助さんの館へかかつて來た。ア、そうぢや、李助さんも結構な生田の森の館を棄てて聖地へ行かつしやる筈だ。初稚姫、玉能姫さんは、年は若うても、流石は立派な方だ、一度ならぬ、二度ならぬ、三千世界の御神業の花形役者だ。心一つの持樣で、あんな結構な御用が出來るのだからなア。そこらの人、爪の垢でも煎じて飲んだら藥になるだらう。ウッフ、、、」

高姫「誰が何と云つても聞くものか。そんな巧い事言つて、此館に高姫を入れまいと防禦線を張るのだらうが。そんな事を……ヘン喰ふ高姫で御座いますかい。そんなら宜しい。裏門から這入つてやらう。さうすればお前の顔も立つだらう」

と掛合ふ所へ、東助の妻お百合は門口の喧しき聲に氣を取られ、座を立ちて一人の侍女と共に此場に現はれた。

虹公「これは〳〵奥樣、よう來て下さいました。三五教のヤンチヤ組の高姫一行がお出でになりやがつて、此門を通せと仰有りやがるのです。如何云つて謝絶つても、歸らうとは仰有りやがらず。それ程這入りたければ、友彦の樣に厠の穴からでも這入れと云つて居る所で御座います、此御館は表門計りで、裏門と云へば雪隱の穴計りそこからでも這入らうと云ふ熱心な方ですから……どうでせう、御主人はあれ丈嚴しくお戒めになつて居ますけれども、そこは又臨機應變、どつと讓歩んで通してやつたら如何でせう」

お百合「これは〳〵高姫樣御一行で御座いますか。噂に承はつて居りましたが、ホン

に立派なお方計り、」ようお入來なさいました」

高姫「私は仰有る通り、高姫、高山彦、黒姫の三人で御座います。何時やらは御主人の東助さんに、家島まで送つて貰ひ、アタ意地くねの惡い、私の家來の清、鶴、武の三人を自分の船に乘せ、私を家島に島流しも同樣な目に會はし、其後と云ふものはイロ〳〵難多と此高姫を苦めて下さいまして、實に有難う御座います。其お蔭で餘程私は身魂研きをさして頂きました」

百合「どう致しまして、お禮には及びませぬ。苦勞の塊の花の咲く三五教で御座いますから、貴女の樣な肝腎のお方を改心させる御用を勤めた私の主人は、謂はば高姫のお師匠さん格ですな。オッホ、、、」

高姫「何と、理窟も有れば有るものだな。海賊上りの東助の女房丈の事あつて、巧い逆理窟をお揑ね遊ばす。斯んな立派な館を建てて、會長々々と言つて居つても、人品骨柄の下劣な事、破れ船頭が性に合うとる。海賊をやつて澤山な寶を奪ひ取り、財産家となつて、榮耀榮華の有り丈を盡し、今度は三つの御神寶にソロ〳〵目を付け出した大泥坊の計畫中だらう。何と云つても奥へ踏み込み、言依別、國依別を助けて、失敗をさせない樣に注意するのが、男子の系統の高姫の役だ。サア案内をなされ」

お百合「そんなら開放致しませう。自由自在御勝手にお探し遊ばせ。此館は四方八方蜘蛛の巣の如く、到る所に暗渠が堀つて御座りますから、うつかりお這入りになると生命がお危なう御座いますぞ。これ程廣い屋敷でも、安心して歩行ける所は、ホンの帶程より有りませぬ。それも生悟東助殿が繪圖面を持つて出て居られるものです

から、私達は庭先だとて迂濶り歩けないので御座います。それ丈前に御注意申し上げて置きます」

虹公「日の出神の天眼通様、貴女はよく御存じだらう。サア、トットと早くお這入りなされ」

高姫は双手を組んで思案に暮れ乍ら、一生懸命に祈願を凝らし出した。稍あつて高姫は

高姫「あゝ此處にはヤッパリ居りませぬワイ。……サア黒姫さん、高山彦さん、一時も早く生田の森へ参りませう。如何やら彼の方面に三個の寶玉が現はれました。私の天眼通にチャンと映つた。早く往かないと又チョロまかされると大變だ」

お百合「どうぞ、さう仰有らずと、御ゆつくり遊ばしませ」

高姫「ヘン、京のお茶漬は措いて下されや」

とブリン〳〵と肩や尻を互交ひに搖り乍ら、磯端の船に身を任せ、アール、エースの兩人に艪櫂を操らせ乍ら、一目散に再度山の峰を目標に漕いで行く。

執着心に搦れて　玉を抜かれた高姫や
黒姫二人の玉探し　太平洋の彼方まで
心焦ちて駈け出し　どう探しても玉無しの
力も落ちて捨小舟　高山彦等と五人連れ
折角永の肝煎りも　泡と消えゆく波の上
誠明石の向岸　浪の淡路の島影に
船を漕ぎつけ東助が　館の門に走せついて

虻と蜂との門番に　上げつ下ろしつ揶揄はれ
心を焦ちて高姫は　又もや玉に執着を
ます〳〵強く起しつつ　再度山の山麓の
生田の森へと急ぎ行く。

生田の森の杢助館には、國依別、秋彦、駒彦の三人が、臨時留守居役として扣ねて居た。

國依別「玉能姫樣も此館をお立ちになつてから、隨分月日も經つたが、どうやら今度は龍宮の一つ島から結構な寶を受取つて、聖地へお歸りになると云ふ事だ。何れ初稚姫樣、玉治別も一所だらう。何時までも私も斯うしては居られないから、聖地へお迎へに行かねばならぬから、……秋彦さん、駒彦さんと兩人で此館を守つて居て下さい。直に又歸つて來ますから……」

秋彦「ハイ承知致しました。併し乍ら萬々一、例の高姫一行が歸つて來て、國依別さんは何處へ行つたと尋ねた時には、何と云つて宜しいか、それを聞かして置いて貰いたいですなア」

國依「滅多に高姫は歸つて來る樣な事はあるまい。併し萬一來たならば、一層の事、事實を以て話すのだな」

秋彦「そんな事話さうものなら、高姫は氣違になつて了ひますよ。三つの玉の所在は分らず、それが爲に一生懸命になつて居る矢先、又もや結構な五つの玉を、同じ龍宮島から、初稚姫樣や玉能姫さんが頂いて歸つたのだと言はうものなら、大變ですからなア」

駒彦「オイ秋彦、取越苦勞はせなくても良いよ。其時は其時の事だ。……國依別さん、何事も刹那心で我々はやつてのけますから、御安心下さつて、どうぞ一時も早く聖地へお迎へに行つて下さいませ」

國依「それぢや安心して參りませう」

と話して居る。窓を透かしてフッと外を見れば、夜叉の樣な顏した高姫、黑姫、高山彦外二人、此方に向つて慌しく進んで來る。

駒彦「ヤア國依別さん、秋彦、あれを見よ。呼ぶより誹れだ。高姫が血相變へて歸つて來よつた。三人が斯うして居ると面倒だから、先づ此駒彦が瀨踏みを致します。あなた方二人は奥の間へ這入つて、樣子を考へて居つて下さい。私が一つ談判委員になりますから……サア〳〵早く、見つけられぬ內に……」

「と促せば、國依別、秋彦はニタリと笑ひ乍ら、次の間に入り、火鉢を中に松葉煙草を燻べて樣子を考へて居た。漸く近付いて來た高姫、表の戸を敲いて

高姫「モシ〳〵、頼んます」

中より駒彦はワザと婆アの作り聲をし

駒彦「此山中の一つ家を叩くは、水雞か、狸か、狐か、高姫か……オットドッコイ鶯か、眞黑黑姫の烏の親方か、ダ…ダ…ダ……誰だい」

外から高姫、婆聲を出して

高姫「誰でもない。日の出神の生宮だ。早く戸を開けぬか」

駒彦「今は日の暮だ。日の出神は朝方に出て來るものだよ。蝙蝠の神なれば戸を開けてやるが、日の出神なればマア〳〵御免コウモリだよ。オッホ、、、」

高姫「此館には國依別と云ふ奴ハイカラが留守番をして居る筈だが、お前は一体、何と云ふ婆アだ。根つから聞き慣れぬ聲だが、誰に頼まれて不在の家を占領して居るのだ」

駒彦「オッホ、、、、私かいな。私は國依別の妾だ。雀百まで牡鳥忘れぬと云うて、棺桶へ片足を突込んで居る鰥腰の婆アでも、姑の十八を言ふちやないが、昔は隨分、あちらからも、此方からも袖を引かれ、引く手數多の花菖蒲、それは〳〵隨分もてたものだよ。殘りの色香は乗て難く、どこやらに好い匂ひがあると見て、色の道には苦勞をなされた國依別さんが、ヅッコン私に惚込んで、五十も違ふ年をし乍ら朝から晩まで大事にして下さるのだ。思へば〳〵私の樣な運の好い者が何處にあらうか。男やいやいに蛆が湧くと云ふが、女やいやいを程結構なものはないワイの。お前はどこの婆アだか知らぬが、餘程よい因果者と見て、其面は何だい。汐風に吹かれ、顏の色は眞黒け、何方が黒姫だか、アカ姫だか、テント見當の取れんお仕組だ。オッホ、、、。お氣の毒樣乍ら、婆アの一人暮し、お茶一つ上げる譯にも行かぬから、トットと歸つて下され」

高姫は戸の節穴から一寸中を覗き

高姫「日の暮れの事とて確實は分らぬが、お前は婆アの假聲を使つて居るが、男ぢやないか。チッと怪しいと思つて居た。白狀せぬかい。日の出神の眼を晦ます事は出來やしないぞ」

駒彦ヤッパリ婆の聲色を出して

駒彦「言靈は女で體は男だ。變性男子の根本の生粹の神國魂の御身魂だよ」

高姫「ヘンお前は元は馬公と云つた駒彦だらう。馬い事言つて私達を駒らさうと思つても、日の出神は……ヘシ、そんな事では困りませぬワイ。グヅ〳〵申さずに、サツさと開けなされ」

駒彦「アツハ、、、、、とうと日の出神に發見せられました。……叩けば開く門の口。叩いて分る俺の口。サツパリ化けが現はれたか。三千世界の大化者も薩張駄目だ」

と無駄口を叩き乍ら、中よりガラリと戸を押開け、駒彦は腰を屈め、揉み手をし乍ら女の聲を使ひ

駒彦「これは〳〵三五教にて曙れなき御威勢の高き、變性男子の系統の高姫様、黒姫様高山彦様の御一行、よく〳〵お訪ね下さいました。私は若彦の妻玉能姫と申す者何時も〳〵結構な御教訓を喝はりまして有難う御座ります。紀州に於て高姫様に夫婦對面の所を見付けられ、イヤモウ赤面を致しました。オツホ、、、」

高姫「ロレ駒彦さん、人を馬鹿にするのかい。大きな口を無理におチョボ口にしたり、玉能姫の聲色を使つて何の態だ。婆になつたり、娘になつたり、此頃はチツとどうかしとりますな」

駒彦「ハイ、大にどうかしとります。何分三個の玉は紛失致し、玉能姫に、折角御用を承はり乍ら、蛸の場壺を喰はされ、此頃又五つの玉が聖地に這入つたとやら云ふ事、それで此駒彦も氣が氣でならず、心配をして居ると、最前の樣に黒姫とか云ふ婆アの靈が憑つたり、玉能姫の靈が憑つたり、時々刻々に聲までが變ります。ハイ〳〵誠に面目次第も御座りませぬワイ。アツハ、、、」

と肩を揺る。黒姫は

黒姫「お前さんは黒姫の霊が憑つたと仰有つたが、それは誰の事ですか。聞捨ならぬ今のお言葉……」

駒彦「駒彦の身魂は神が御用に使うて居るから、イロ〳〵の霊魂が憑るぞよ。駒彦が申しても駒彦が云ふのでないぞよ。口を借る計りであるぞよ。駒彦を恨めて下さるなよ。何事も神の仕組であるぞよ。駒彦は何にも知らず……ウン〳〵」

黒姫「エー馬鹿にしなさるな。併し此館はお前一人かな」

駒彦「一人と言へば一人、大勢と言へばマア〳〵大勢だ」

黒姫「其大勢は何處に居るのだい」

駒彦「何を言うても神様の容器に造られた此肉体、天津神、國津神、八百萬の神が出入り遊ばす駒彦が肉の宮、チヨコ〳〵日の出神様もお出で遊ばすなり、龍宮の乙姫さんもチヨコ〳〵見にますぞよ。真の乙姫は此頃は駒彦の肉の宮に宿換を致したぞよ……と仰有つて、結構な玉を見せて下さいますワイ。ここにも現に天火水地結の五つの玉が、ヤツパリ……ヤツパリぢやつた。マア言はぬが花ですかいな」

高姫得意顔になり

高姫「それ、黒姫さん、高山彦さん、私の天眼通は違ひますまい。キツと生田の森に隠して有るに違ないと言つたぢやありませぬか。東助館にグヅ〳〵して居ようものなら、又後の祭になる所だつたが、斯う自分の口から白状した以上は、的切り玉の所在は此館に間違ない。……サア駒彦、モウ叶はぬ。綺麗サツパリと其玉の所在を系統

の肉体にお明かしなされ」

駒彦「玉の所在は龍宮島の諏訪の湖、玉依姫命さんが、モウ時節が到來したから、身魂の立派な守護神に渡したい〳〵と仰有るので、玉照姫様の御命令に依り、言依別神様から、東助さんや國依別さんに……お前受取りに往つて來んか……と云つて御命令が下つたさうです。私も御用に行きたいのだが、怪体の惡い、留守番を命ぜられ、指を嘶へて人の手柄を、遠い所から傍觀して居るのだ。本當に羨ましい事だワイな」

高姫「そりや又本當かい。モウ既に聖地へ納まつたと云ふぢやないか」

駒彦「何分、時間空間を超越した神界の御經綸だから、過去とも未來とも現在とも、サツパリ凡夫の我々にや分りませぬワイ。アツハ、、、」

高姫「どうやら奥の間に人の氣配がする。煙草を吸うて居るのか、煙管で火鉢を、ポン〳〵喰はして居るぢやないか。松葉臭い薫がして來出した。誰が居るのだ、白狀なされ」

駒彦「ハイ、鼠が二三匹奥の間に暴れて居るのでせう」

高姫「それでも煙が出るぢやないか」

駒彦「鼠が煙草を吸うて居るのでせうかい」

高姫はスタ〳〵と奥の間の襖を引開け飛び込み、二人の姿を見て

高姫「これはしたり、國依別、秋彦の兩人、卑怯千萬にも不在を使ひ、奥の間に姿を隱し、我々を邪魔者扱ひになさるのかーッ」

と言葉尻に力を入れ、角を立てて呶鳴りつけた。國依別は杢助流にグレンと仰向にひ

つくり返り、手と足を上の方にニユウと伸ばし

『チユウ〳〵〳〵』

と鼠の鳴き聲をして見せる。秋彦は亦グレンと轉倒り、同じく手足を天井の方へニユウと伸ばし

『クツ〳〵〳〵、キユツ〳〵〳〵』

と脇の下に笑ひを抑へて居る。高姫は

高姫『何と云ふ不作法な事をなさるのだ。四足の眞似をしたりして、本守護神が現はれたのだ。ア、隱されぬものだ。身魂と云ふものは……日の出神の御威光に照らされて、此憐れな態。斯んな身魂を言依別の奴ハイカラが信用して居るのだから……本當に悲しくなつて來た。幹部の奴は色盲計り煙から、人物を視る目が無いから困つた者だ。誠のものは排斥され、斯んな者が雪隱蟲の高上りをするのだからなア』

國依『チウ〳〵〳〵』

秋彦『クウ〳〵〳〵』

國依『サツパリ……身魂がチウクウに迷うて居るワイの、ウツフ、、、。キユツ〳〵〳〵』

と體一面に笑ひを忍んで、波を打たせて居る。

高姫『コレ〳〵黒姫さん、高山彦さん、一寸來て御覽、大變な事が出來致しました。天が地となり、地が天となり、サツパリ身魂の性來が現はれて、足が上になつて歩く人間が現はれました。どうぞ皆さん、やつて來て、天津祝詞を奏上し、元の人間になる樣に拜んでやつて下さい。あゝ惟神靈幸倍坐世、惟神靈幸倍坐世』

と氣の毒さうな顏して、一生懸命に祈願をこめて居る。

（大正一一、七、一二、舊閏五、一八、松村眞澄錄）

第一八章　玉の所在（七六四）

高姫の言葉に從ひ、黑姫、高山彥、アール、エースは一生懸命汗みどろに成つて、兩人の身魂の救はれん事を祈願し始めた。國依別、秋彥兩人はムックと起き上り、手を組みドスン〳〵と座敷の眞中に床がぬける程、踵び上り始めた。

高姫『皆さん、御覽なさい。日の出神の御神力と言ふものは偉いものでせう。あの通り生き乍ら畜生道に陷ち込み、足をピンと上にあげて、如何する事も出來ずに鼠の靈に憑られて……チユウ〳〵、クウ〳〵……と泣いて居りましたが、日の出神の反魂力に依りて此通り元の樣になりました。座敷中跳び上つて居つたのも、此日の出神の御神力に恐れての事、サア皆さん、寄つて集つて四方八方から鎭魂攻めに會はし、

國依別等を靈媒として、誠の玉の所在を白狀させやうじやありませぬか」

黒姫「そりや、至極結構でせう」

駒彦「もし〳〵、高姫さん、黒姫さん、何卒御心配下さいますな。彼奴ア、あんな事をして貴方等を揶揄つて居るのですよ。本當にして居ると馬鹿を見ますよ」

高姫「お默りなさい。お前さん等に分つて堪りますか。此方には日の出神と龍宮の乙姫とが憑いて居ります。揶揄つて居るのか、本當か、邪靈が憑つて居るのか、そんな事が分らずに如何して神界の御用が出來ますか。お前さんのやうに、婆になつたり娘になつて胡魔化さうとしても、日の出神の此高姫が……ヘン……見れば直ぐ化が現はれる。お前さんはゴテ〳〵言ふ資格はないから、其處邊のベン〳〵草でも引きなさい。それが性に合ふて居ります哩、オホ、、、」

駒彦「高姫さん、お前さんの仰有るのも一應御尤もだが、よく泳ぐ者はよく溺るると言ふ事がありますぜ。神懸りの道を知らぬ者は神懸りに騙される事は無いが、お前さんの樣に神懸りに不徹底して居ると、却つてアフンと言ふ目に會はされるか知れませぬよ。此處は例のアフン鐵道の終點、ビクリ驚だからなア」

高姫「エー、入釜しい哩な。まア默つて此生宮の審神を見て御座れ。今に此兩人に口をきらして、お前達の一切の素性を素破抜かすから……。アヽア、龍宮の一つ島から歸つて來る途中隨分苦勞をしたが、一つ試驗の爲め靈をかけて聞いて見やう」

と言ひ乍ら兩手を組み

高姫「大將軍樣、十惡道樣、地上大神樣、地鎭荒神樣、大黒主神樣、鷹鳥神樣、何卒〳〵々々此兩人にお憑り下さいまして、玉の所在を一伍一什お示し下さいませ。天下國

家の一大事、決して高姫や黒姫の私有物に致すのでは御座いませぬ。惟神霊幸倍坐世。一、二、三つ此玉が一時も早く出ます様に、一、二、三、四、五つの玉が又もや現はれたと言ふ事、それが眞實ならば、今度こそは高姫、黒姫、高山彦の三人にお渡し下さい。一、二、三、四、五つの玉が早く發見致しまする様……六、七、八、九、十、百、千、萬、假令何處の果に隱してあるとも、大神様の御眼力を以て御發見遊ばし、此肉體の口を借つて直接に御示し下さいませ」

と、ウーン〳〵靈を送る。國依別は組んだ手を頭上高くさし上げ、弓の様に反り身になつて

國依「ウ、、、運命の網に引かれて、龍宮の一つ島まで彷徨ひ歩く汝の心の可憐しさ。オ、、、おれは……俺は、俺は、俺は、俺は、フ、、、再度山の大天狗であるぞよ高山彦や黒姫の心事を憐み、聖地の神には濟まぬなれども、玉の所在を知らして遣はす。それに就いては意地くねの惡い高姫が、此處に居つては絶對に言ふ事は出來ぬぞよ」

高姫「再度山の大天狗、そりやチツと量見が違ひはしませぬか。高山彦や黒姫に知らして此高姫に知らさぬと言ふのは、そりや又如何言ふ理由じや。それを聞かして下されー」

國依「それは……それは……それは我眷族の小天狗が、秋彦の肉體に憑つて居るから、それに聞いたが宜からうぞ。俺はもう引き取るぞよ」

高姫「引き取ると言ふても此事解決をつける迄、靈縛を加へて引き取らせませぬぞ。サア高姫に言はれぬと言ふ其理由から判然と聞かして貰ひませう」

國依『日の出神は世界中見ゐ透く神じやから、玉の所在は大天狗が知らさずともよく御存じの筈だ。中上ぐるも畏し、釋迦に説教を致す樣なものだ。高姫に對し玉の所在を明かさぬのは、畢竟敬意を拂つて、日の出神の御神力を輝かさんと思ふ大天狗の眞心で御座る』

高姫『お心遣ひは御無用に成されませ。さあチヤツと日の出神樣の樣な尊い神に御苦勞を掛けるのも畏れ多い。お前さん、知つてるのなら小さい聲でソツと言つて下さい。黒姫や高山彦は、言はゞお添物だから如何でも宜しいのだ』

と耳の端に口を持つて行つて小さい聲で囁く。國依別は故意と大きな聲で、

國依『それは高姫、一寸量見が違ひは致さぬか。今耳の端で……高姫さへ玉を手に入れたら宜い、高山彦や黒姫なぞはお添物だ、如何でも宜い……と囁いたであらうがな。そんな二心で黒姫、高山彦を扱つて居るのか。ヤイ、高山彦、黒姫、よう今迄高姫に馬鹿にしられよつたな。もう神懸りは嫌になつた。俺は斯う見ゐて居ようても、チツとも靈は懸つては居らぬぞ。國依別は肉体で申して居るぞよ。それに間違ひは無いぞよ。よく審神して下されよ』

高姫『惡神と言ふものはよく嘘言をつくものだ。コラ大天狗、其手は喰はぬぞ。國依別の肉体が言ふた等と巧く逃げ樣と思つても、いつかな〳〵此日の出神が睨んだ以上は逃しはせぬ。サア綺麗サツパリと、高姫、黒姫、高山彦の三人の前で玉の所在を白狀致すが宜からう』

國依『三つの玉の所在を知らせませうか、但は五つの玉の所在からお知らせ致しませうか』

高姫「何卒三つの玉の所在は申すも更なり。五つの玉の所在も一緒に仰有つて下さい。さうすれば再度山に立派なお宮を建て、其上大天狗の遊ぶ公園を造つて上げますから……何卒仰有つて下さい」

國依「そんなら是非に及ばず、知らしてやらう。三つの玉は二三日中に聖地へ八咫烏に乘つて來るぞよ。一つの玉は玉治別、も一つは玉能姫、も一つはお玉の方、之が三つの生魂であるぞよ。又も玉照彦、玉照姫を合せて五つの御魂となるぞよ。アハヽヽ」

高姫「エー、合點の惡い。それは人間の名じやないか。本當の寶玉は何處にあるのだ、それを言ひなさい」

國依「寶の處は此國依別も、秋彦、駒彦も聖地へ行き度いのが腹一杯なれど、折あしく其方等がやつて來たものだから行くに行かれず、迷惑致して居るぞよ。それに就いて玉の所在を此處ぞと嘘言を言ひ、高山彦の一行を或地點へ玉探しにやつて置き、其まゝコツソリと三人が聖地に行つて秘密の神業に參加する積りであつたが……アヽ、如何したら宜いかなア」

高姫「それ見たか、矢張り國依別では無い。大天狗の神懸りだ。國依別が如何して自分の秘密を自分の口で言ふものか。これ大大狗、そんな嘘言云ふた處で此高姫は承知しませぬぞ。早く玉の所在を知らして下さい。大天狗なら何でも知つてる筈だ」

國依「そんなら玉の所在を詐つて騙してやらうか。間違つても決して國依別の肉体に對して不足を申さぬか」

高姫「決して不足は申さぬ。嘘言から出た誠、誠から出た嘘言と言ふ事がある。嘘實不

二、表裏一体だ。何でも宜いから言つて下さい。物も研究だ。オーストラリヤ三界まで調べに行つて來た熱心な我々一同、假令一日二日遲れても構ふものか。なるべく本當の事を嘘言らしく言ふのだよ」

國依「本當の嘘言の事を、本眞らしく申してやらう。神の奥には奥があり、其又奥には奥があるぞよ」

高姫「エー、そんな事は妄の言ふ事だ。奥の奥の其奥は羽織の紐じやないがチヤンと胸にある。サア言つて下さい」

國依「オヽヽ、俺は、俺は大天狗の事であるから、言依別命の爲さる事はチツとも分らぬぞよ。實の處は知らぬと申すより外は無いぞよ」

高姫「エー、意茶つかさずに置いて下され。あた辛氣臭い、早く言ふのだよ。何時まで人を暇さうに焦慮らすものだない。時機切迫の今日の神界、假令一分間でも空に光蔭を費やす事は出來ませぬ」

國依「此大天狗が知らぬと言ふたら何處迄も、シヽ知らぬぞよ。ウフヽヽヽ」

黒姫「もし〳〵高姫さん、此奴ア駄目ですよ。あんまり玉々と言つて玉に魂を抜かして居るものだから、大天狗の鼻高が我々を嘲るのですから、よい加減になつて置きなさいませ」

高姫「これ黒姫さん、そりや何を仰有る。掃溜の中にも金玉が隠される事がある。斯う言ふ低い神に聞いた方が却て都合が好いのだ。少し腹のある神は中々秘密は申さぬが、斯う言ふ低い神は責めて〳〵責め倒すヒツイ白狀するものだ。お前さんも來てチツと鎭魂攻めを手傳つて下さい。何處までも責めて、白狀させねば措きませぬぞ

ね」

國依「ア、ア、惡戯が本當になつて來た。一進も三進も方法がつかぬ哩。……もし高姫さん、何も憑つては居りませぬ。國依別が出放題を申したのですから、何卒神直日大直日に見直し聞直し、一座の興だと思つて諦めて下さい」

高姫は首を振りウンと息をかけ

高姫「一座のけふも明日もあつたものかい。何處までも調べて〳〵、調べ上げねば措きませぬぞ。假令百日かゝつても千日かゝつても白狀させねば措くものか。サア大天狗、もう好い加減に白狀したら如何だい」

國依「ア、困つたな。實の處は早く聖地に行かねば、言依別神樣にお目玉を頂戴するのだ。然し高姫と一緒に歸つては困るなり、實際は言霊だから何處に玉が隠してあるか、そんな事が分るものか。國依別の肉体に間違ひないから何卒疑ひを晴らして下さい」

高姫はキッとなり

高姫「こりや、再度山の大天狗奴、何と言つても白狀させねば措くものか」

と又もや汗をたら〳〵流し、「ウン〳〵」と靈を送る。側に目を寒ぎ手を組んで坐つて居た秋彦の方は根つから、相手になつて呉れぬので

秋彦「ア、ア、偽神懸りも辛いものだ。誰も相手になつて呉れないから本當に玉なしだ。ア、もう廢めとこうかい」

高姫「これ、小天狗、巧い事化けやがるな。何と言つても肉体じや無い。サアお前はチッとでよいから何方の方面だと言ふ事位は知らして呉れ。さうしたら公園を拵へお

宮を建て、祀つてやる」

秋彦「公園も何も要りませぬ。あゝ足が痛くなつて來た」

と立ち上らうとする。

高姫「これ黒姫さん、高山彦さん、秋彦の兩方の手をグッと握つて下さい。小天狗の奴、何處へ肉体を連れて行くか分りませぬぞ。白狀させる迄は此肉体を外に遣る事は絶對になりませぬぞ」

國依「そんなら、エー、白狀致します。再度山の大天狗に間違ひはありませぬ。又此秋彦の肉体に憑つて居るのは私の眷族小天狗です。何卒しつかり手足を掴まへて立つて去なぬ樣にして下さい」

秋彦「これ〳〵國依別さん、殺生な事を言はないで下さい。足が痛んで仕方がありませぬ。お前さんがするから眞似したのが病付きだ。……もし〳〵御兩人樣、どうぞ手を放して下さい。お前さんも肉体か神懸りか分らぬ事はあるまい。本當によく調べて下さい」

黒姫「何と仰有つても小天狗は小天狗だ。國依別は平常から鼻が高いから大天狗が憑るのは當然だ。お前も鼻高だから身魂相應の小天狗が憑るのだ。巧い事肉体に化てもあきませぬぞよ」

國依「アハヽヽヽ、曉没漢ほど困つたものは無い哩。そんなら僞の神懸りで大天狗が高姫に玉の所在のスカタンを知らして上げやうかい。其代りに知らしてやつたら此處を立ち退くだらうなア」

高姫「何處迄もお前を引張つて行つて神懸りをさせて玉を探させ、土の中でも何尺下と

言ふ事を透視さすのだから、玉が出る迄放しませぬぞね」

國依「こいつは困つたなア。俺も自分乍ら因体だか神懸りだか分らぬ樣になつて仕舞つた」

高姫「それ見なさい。御魂だがハツキリと白狀しなさい、事と品とに依つたら此場で開放してやるかも知れませぬ」

國依「別に開放して貰はなくてもよい。靈縛されたのでも無し、自由自在に行き度い處に行けるのだが、一つ困るのはお前さんが跟いて來る事だ。跟いて來さへせねば國依別は國依別としての御用が勤まるのだ。二三日遲れて聖地へ歸るなら歸つて下さい。それ迄にチヤンと秘密の相談をしてお前さん達にアフンとさせる仕組をせねばならぬからなア」

高姫「何と言つても國依別が其んな自分の不利益な事を喋るものか。再度山の大天狗に間違はあるまいがな」

國依「後程大きな聲で喚鳴りつける。そんなら三つの玉の所在を一人々々一ケ所づゝ申し上げるから、互に秘密を守つて下さい。三人が三人乍ら分らない樣にすると言ふお約束になれば、實際の事を大天狗が申し上げませう。實の處は言依別命樣が明日の朝早く掘り出しに御出でになり、又外へお隠し遊ばすのだから、玉を手に入れるのなら今の内ですよ」

高姫「あ、さうだらう〳〵、そんなら高山彦さん、黒姫さん、妾は如意寶珠の玉の所在を聞きますから、貴方達は彼方へ行つて下さい。順番が廻つて來たら知らせますか

ら……」

黒姫「エー、仕方が無い。そんなら順番が來る迄待つて居ませう」

と次の間に下がる。

國依「此家を遠く離れて森の中まで行つて下さい。さうでないとお前さんの副守護神が立聞きすると困るから……」

黒姫「ハーイ〳〵」

と長い返事をし乍ら出でゝ行く。

高姫「さア御注文通り誰も居りませぬ。チャッと仰有つて下さいませ」

國依「金剛不壞の御玉は、杢助の娘、初稚姫、言依別の手より受取り給ひ、近江の國の竹生島の社殿の下に三角石を標として匿し置かれたぞよ。その方は只今より黒姫に姿を隠して、一時も早く竹生島に向つて玉取りに行くが宜からう。愚圖々々致して居ると言依別の使者に先に堀出されて仕舞ふぞよ」

高姫「何でも妾の靈眼に映じたのは島じやと思ふて居た。お禮は後で申し上げる。又國依別の肉體も良い御用をしたのだから、肉體に對しても後で御禮を申すから……」

と欣々と杢助館の裏口より駈出して仕舞つた。

國依「オイ、秋彦、駒彦、如何だ。俺の狂言は餘り巧くやり過ぎて、本當の大天狗にしられて仕舞つたちやないか。アハヽヽヽ」

秋彦「然し國依別さん、本當に金剛不壞の玉は竹生島に隠してあるのですか。俺は初めて聞きましたよ」

國依「大きな聲で言ふな。疑ひ深い高姫がソッと俺達の話を立聞きしてるか知れぬぞ。

……オイ、駒彦、家の周圍を見て來い」

駒彦「イヽエ、高姫は雲を霞と走つて行きましたよ」

國依「サア、之から此大天狗が黒姫、高山彦を何とか撒かねばならぬ。今度は何處に隠したと言はうかな。エー、よし〳〵、其時の鹽梅ぢや。……オイ駒彦、黒姫さん唯一人來いと言ふて呼んで來い」

駒彦「承知しました」

と尻引からげ、森の中に控へて居る黒姫を迎へて來た。黒姫はイソ〳〵として足も地に着かず此場に現はれた。

國依「今改めて大天狗より黒姫に黄金の玉の所在を知らしてやらう。高姫は既に實の所在を敎へられ堀出しに出立致したぞよ。サア秋彦、駒彦、其方は門外へ出て仕遁へ、秘密が洩れると大變だから……」

二人は笑ひ乍ら門口へ飛び出す。

國依「再度山の大天狗が今改めて黒姫に黄金の玉の所在を知らしてやる程に、假令高山彦になりとも口外せぬと言ふ事を誓ふか、如何だ」

黒姫「ハイ、決して秘密は洩らしませぬ」

國依「そんなら確に聞け。近江の國は琵琶の湖、竹生島の辨天の祠の下に、三角形の石を標として三尺下に黄金の玉は隠されてあるぞよ。早く參らんと言依別の使の者が堀出して、後でアフンとせねばならぬぞよ。一時も早く行つたが宜からう」

黒姫「それは〳〵、有難い貴方のお示し、そんなら之から參ります」

と裏口より夜叉の如く尻引からげ、雲を霞と駆け出した。續いて高山彦此處に招かれ

て又もや國依別の居間に這入つて來た。」

國依「ヤア其方は高山彦で御座つたか。今大天狗が知つた丈けの事を敷へて遣はす。高姫には金剛不壞の如意寶珠の玉の所在を示し、黒姫には黄金の玉の所在を知らした處、兩人は時おくれては一大事と、玉の隠し場所へ走つて行つたぞ。紫の玉の所在は、瑞の御魂の佩かせ給ふ十握の劍より現はれ出でたる、三女神の鎭まり給ふ近江の國は竹生島・辨天の祠の下に、三角形の石を乘せて三尺ばかり底の方へ隠してあるぞよ。一時も早く取りに行かぬと聖地より堀出しに行くぞよ。如何じや有難いか」

高山彦「ハイ、有難う。三人共願望成就、御禮は後から、ゆつくり……左樣なら……大天狗樣、之にてお別れ致します」

國依別「汝は裏口より走つて行け。そうしてアール、エースの二人を伴ひ、刻を移さず走つて行くが宜いぞよ」

高山彦「何から何まで御注意下さいまして有難う御座います。御禮は後より……」と言ひ捨てゝ、長いコンパスを大股に踏張り乍ら地響き打たせて、ドスン〳〵と床を鳴らして進み行くのであつた。國依別は後見送つて

國依「アハヽヽヽ、三五の神の道にはチツとも虞言は申されぬのだが、アヽ責められもや仕方がない。玉はなくても辨天樣へ參拜して結構な悟りを開き、玉以上の御神德を頂くと思つて竹生島詣りをさしてやつたのだ。知らず〳〵に瑞の御魂に頭を下げさすと言ふ俺の仕組だ。何と妙案だらう」

秋彦「其奴ア上出來だつた。然し駒彦さん、お前しつかり留守して居て呉れ。圖愚々々して居ると初稚姫樣や玉能姫樣が聖地へお歸り遊ばした後になつては大變だから、

俺達二人は之から聖地へ參拜するから……あと宜しく頼むよ」

駒彦「ヨシ、承知した。サア早く行つたが宜からう。東助さんも、モウ今頃は聖地へ安着されてる時分だ。お前達兩人の歸るのを首を長うして待つて居られるだらう。サア後は俺が引受けるから、心配せずに早く足の用意に掛つて呉れ」

國依別、秋彦は急ぎ旅裝を整へ、館を後に聖地を指して進み行く。

（大正一一、七、一二、舊閏五、一八、北村隆光錄）

第一九章　竹生嶋（七六五）

金剛不壞の如意寶珠　黄金の玉や紫の
珍の寶に魂を　抜かれて胸もぎくしと
浪高姫や黒姫が　高山彦と諸共に
高山低山野の末や　河の中迄村肝の
心を配り氣を配り　探して見れど影さへも
見るぬみたまの苦しさに　又も龍宮を後にして
珥界、幽界の瀨戸の海　命を的に淡路島
洲本の郷に名も高き　東助館に立ち向ひ

虻蜂取らずの問答に
手ふ折しも女房の
揺り落されて荒浪の
又もや船を操りて
生田の森に着きにける。
高山彦は黒ン坊の
教の館に來て見れば
烏の聲も悲しゆに
門に佇み戸を叩き
中より聞ゆる婆の聲

やつさもつさと時移し
お百合の方にうま〳〵と
打ち寄せ來る汀より
再度山のふもとなる
「高姫、黒姫始とし
アール、エースを隨ひて
夕陽西に傾きて
塒求むる宵の口
モウシ〳〵と訪へば
訝かしさよと高姫は

戸の隙間より打ち覗き
的切男と判明し
馬鹿にするのも程がある
是非に及ばず駒彦は
俄に作るおチョボ口
優しき女の作り聲
能うまアお越し下さつた
私の體は駒彦ぢや
震い出したる折もあれ
重い體を自由自在

老婆の聲の持主は
お前の聲は駒彦か
早く開けと打ち叩く
中よりカラリと戸を開けて
揉手しながら腰屈め
高姫さんや御一同
サア〳〵お入りなされませ
俄に體が變になり
黒姫さんの靈が來て
婆さんの聲を出しました

縋いて憑つた玉能姫
惚々するよな涼し聲
高姫司は横柄に
高山彦や黒姫を
國依別や秋彦は
一時逃れに身を隠し
松葉の粉煙草吸ひながら
高姫一行耳を立て
「こりや大變と兩人は
どろりと轉けて足を上げ
以前に變る淑やかな
我と我が手に惚ました
然らば御免と云ひ捨てゝ
伴ひ一間に座を占る。
こりや耐らぬと奥の間へ
火鉢を前に長煙管
カンと叩いた煙管の音に
つか〳〵奥へ進み入る
杢助司の眞似をして
チウ〳〵クウ〳〵キウ〳〵と

天井の鼠の眞似をする
ほんに可愛や兩人は
なつて仕舞うたか神樣に
日の出神の生宮が
ウンと許りに靈をかけ
國依別は起き上り
ドスン〳〵と飛び上り
鹿公迄が同じよに
餅と團子を搗き交ぜて
手持無沙汰な顏をして
此處へ高姫やつて來て
靈肉共に四足に
お詫申て助けんと
龍宮の乙姫諸共に
天津祝詞を宣りつれば
坐つた儘の神懸り
座敷の中にて餅を搗く
猿の人眞似飛び上り
高姫さんを相手取り
團子理窟を捏ね廻し

嘘から出たる大天狗
しられて仕舞ひ兩人は
締木にかゝつた可笑しさよ。
眞面目な顔で高姫や
押問答のいがみ合ひ
臍茶を沸す苦しさに
可笑しさ紛らす窓の口
どう〳〵天狗になり濟まし
近江の國の竹生嶋
高山彦も黒姫も
どう〳〵眞實の鼻高に
引くに引かれぬ當惑の
駒彦樣子を窺へば
高山彦や黒姫が
吹き出す許り思はれて
外の景色を眺めやり
セッパ詰つた國さんは
高姫さんをチョロまかし
瑞の御魂の聖場へ
やつて仕舞ふた御手際に

駒彦胸を撫で下し
仰せつけられました故
國依別や秋彦の
何卒御無事でお遂者で
早く安着遊ばせよ。
綾の聖地に歸りましよ
高姫さんの爭の
今から思ひやられます
御寵幸倍ましまして
敗北を取らして下さるな
生田の森の留守番を
確り後を守ります
三五教の宣傳使
綾の高天に恙なく
孰れ高姫一行は
その時こそは國さんと
立派な花が咲くであろ
あゝ惟神々々
國依別や秋彦に
三五教の大神の

宇都の御前に騎彦が　心を正し身を正し
慎み敬ひ願ぎまつる」

と別れの歌を謠つて兩人が聖地へ參向の首途を見送るのであつた。あゝ惟神靈幸倍坐世。

（大正一一、七、一二、舊閏五、一八、加藤明子錄）

＝海洋萬里（子の卷）終＝

大正十二年五月廿日印刷
大正十二年六月十五日發行

海洋萬里子の卷奥附

定價　金壹圓五拾錢

編輯者　京都府何鹿郡綾部町字上池田二七番地　櫻井重雄
發行兼印刷者　京都府何鹿郡綾部町大字神宮寺一番地ノ一　近藤貞二
印刷兼發行所　京都府何鹿郡綾部町字本宮東四ツ辻十三番地　天聲社
【振替大阪六〇五三四】

不許複製

▽豫告

海洋萬里（丑の卷）六月廿日發売の豫定
海洋萬里（寅の卷）七月十日發売の豫定

海洋萬里【丑の卷】目次

序文……頁 一
凡例……
總說……
第一篇　伊都寶珠（一三四）
第一章　麻邇の玉……
第二章　眞心の花（一）……
第三章　眞心の花（二）……
第四章　眞心の花（三）……
第五章　眞心の花（四）……
第二篇　蓮華臺上（一三五）
第六章　大神宣……
第七章　鈴の音……
第八章　虎の嘯……
第九章　生言靈……
第三篇　神都の秋（一三六）
第一〇章　船歌……
第一一章　言の波……

第一二章　秋の色……
第四篇　波瀾重々（一三七）
第一三章　三つ巴……
第一四章　大變歌……
第一五章　諭詩の歌……
第一六章　三五玉……
第一七章　返り路……
海洋萬里（丑の卷）目次　終

申込所　丹波綾部町　天聲社
振替口座大阪六〇五三四番

王仁文庫（全十篇）

出口瑞月氏が神授の大經綸と天來の大抱負と、縱横の大神機と時に應じ機に臨みて、隨所に閃發せし文章詩歌其他二十有餘年間積んで山をなす。乃ちその中より、精粹を抜き、珠玉を選び、序を正し類を纂め、王仁文庫と題して茲に刊行の機運に向へるは誠に時代の急迫の然らしむる所にして、實に百萬讀者の渴望を醫すち「神液甘露たり」と謂ふべし。

王仁文庫
第一篇
皇道我觀
定價　金五拾錢
郵税　金貳錢

『皇道我觀』は皇道の眞髓を縱說橫論し、世道人心の歸趨を指示せる大文字にして皇國の臣民たる者の必讀の名著たり。

王仁文庫
第二篇

國教論集

定價　金五拾錢
郵稅　金貳錢

本篇には「國教樹立論」「信仰の墮落」「皇國傳來の神法」「太古の神の因緣」の四篇を收む。皇道の眞髓は一貫して漲り溢れ、國教は腐敗し信仰の墮落して其極に達した る混沌の現今を救ふは本篇に依らざるべからず、太古の神々の因緣は必ず見落す勿れ。

王仁文庫
第三篇

瑞能神歌

定價　金五拾錢
郵稅　金貳錢

瑞の神歌は裏の神諭にして仁愛大神の人類に與へられたる神示なり、方舟なり、救世の網なり、すみやかに起りつゝあり亦速やかに起るべき大地獄道の火焰をまぬがれんとせば、本篇を見よ。叩かざれども開かれし救の門、求めざれ共仁慈の神は之れを與へられぬ。迷ふ勿れ!!來れ!

王仁文庫
第四篇

記紀眞解

定價　金五拾錢
郵稅　金貳錢

世に國學者を以て任ずる者徒に多しと雖も、眞の古事記を解する者一人として無し、日本書記を解する者亦あるなし、之れ其內義を理解する能力なき爲めなり、本篇は「古事記」の一節及び「日本書記」の一節を解釋し密義を發現されしものにして現代と併せ解釋され必ず何人も肯定する樣平易に解かれしもの也

王仁文庫
第五篇

道の大原

定價　金五拾錢
郵税　金貳錢

三丹の巒峰を一眸に收め、保津の清流を双脚に踏みて、高倉山の山徑に宇宙の秘密と人生の幽旨とを問答せる顯幽の二大神人あり。一を本田親德大人の幽奏となし、一を出口瑞月氏の顯體となす。而して其神言秘語を渠拾類纂せられしものは本書也。

王仁文庫
第六篇

多滿の礎

定價　金五拾錢
郵税　金貳錢

本書は教祖　表の神諭に對する出口瑞月氏の裏の神諭の一部分也。迷へる者、惱める者は本書によりて靈魂の糧を求めよ。

王仁文庫
第七篇

記紀眞釋

定價　金五拾錢
郵税　金貳錢

本書は古事記日本記の神代の卷を眞釋して現代の危機を救濟指導せんとするの大文字也。本邦千古の神文古典に含蓄せる豫言的價値を知らんと欲する者は、先づ一讀することを怠るべからず。

王仁文庫
第八篇

八面鉾

定價　金五拾錢
郵税　金貳錢

本書には『公認教と非公認教』以下都合八篇を收輯す。何れも出口瑞月氏が皇道と宗教の本義に就き縱說橫論し、當局並びに世人の無智と偏見とを指摘し批判を加へて遺憾なからしめたり。

王仁文庫
第九篇

道の大本

定價 金四拾錢
郵税 金貳錢

本書は表の神諭に對する裏の神諭なり。言々句々これ混亂的現代に於ける大救世主の救ひの聲にして天國に入るの關門なり。

王仁文庫
第十篇

五色草

定價 金四拾錢
郵税 金貳錢

本書に收むるもの「彌勒の世」「⊙の意義」「三種の神器」「道」「神躰詩」の五篇なり。全然行詰れる現代に處して未來を達觀し、將に來らんとする世の變動を前知せんと欲する者は本書によりて先づ幽玄微妙なる神慮を悟らざるべからず。

販賣所

京都府何鹿郡綾部町
天聲社
振替口座大阪六〇五三四番

290
326

終